

Title

## 第二次大本事件が残したもの

日中戦争・「大東亜戦争」下における道院・世界紅卍字会の「日本化」

Name

玉置文弥

### 抄録

本論文では、戦前期日本最大の宗教弾圧たる第二次大本事件（以下、事件）が残したものとしての世界紅卍字会後援会（以下、後援会）に着目し、その経緯・活動実態を明らかにする。

後援会は道院・世界紅卍字会の「後援会」であるが、道院とは1921年済南において正式に発足した中国の宗教・慈善団体である。扶乩や静座を活動の核心とし、「五教合一」や慈善による「救世」を主唱した。それを担った世界紅卍字会は、信者および会員に政治家や軍人、資本家など有力者が多かったことから、災害救援や病院、学校、銀行の経営など幅広い慈善事業を展開出来た一方で、政治にも関与した。その過程で紅卍字会は1923年に大本教と提携し、「連合運動」（1923-1935）を展開する。両団体は、組織・教義の両面で影響しあいながら、政治的には「満蒙独立」、宗教的には「宗教統一」の目的を創出・接合して融合し、「満洲国」建国運動など様々な活動を行った。

その後事件によって大本教が壊滅したのちは、連合運動も消滅したが、そこに現れたのが後援会である。そこには旧大本教信者や心霊研究者、軍人、政治家など多種多様な人物が参加し、それぞれの思惑が交錯する中で、外務省文化事業部の助成を受けて活動していた。中国本土の紅卍字会に対する寄付や、その紹介、また心霊実験などを行っていたようであるが、その目的は、「日満支親善」「大東亜戦争完遂」にあった。こういった活動はしかし、中国本土の紅卍字会とはほとんど関係なく行われ、やがて神道系サークル篤道大教に合流していく。

すなわち、事件の残した連合運動を、紅卍字会の「日本化」によって「復活」させようとしたのがこの活動であったと考えられる。本論文ではその観点から後援会の実態を明らかにし、日中戦争・「大東亜戦争」期における、宗教・信仰・心霊と政治・国家・戦争の複雑な絡み合いを浮かび上がらせることを目指す。

キーワード：宗教と政治、第二次大本事件、道院・世界紅卍字会、世界紅卍字会後援会、日中戦争

Title

# A "legacy" of the Second Oomoto Incident

**The "Japanization" of Daoyuan-World Red Swastika Society under the Sino-Japanese War and the "Greater East Asian War"**

Name

**Bunya Tamaoki**

## Abstract

This paper focuses on and clarifies the background and the activities of the Supporters' Association of World Red Swastika Society as a "legacy" of the Second Oomoto Incident.

The Supporters' Association "supports" the Chinese religious and charitable organization Daoyuan-World Red Swastika Society. The Daoyuan was officially established in China Jinan in 1921. The core activities of the Fu-ji (Automatic writing) and meditation, and it advocated the "unity of the five religions" and "salvation" through charity.

In 1923, the Red Swastika society formed an alliance with Oomoto-kyo and developed the "Cooperation Movement" (1923-1935). In this process, the two organizations, influencing each other in both organization and doctrine, and engaged in various activities such as the movement to establish the "Manchukuo" state.

After the destruction of Oomoto-kyo by the incident, the Cooperation movement also disappeared, but then the Supporters' Association appeared. The group included former followers of Oomoto-kyo, psychic researchers, military personnel, politicians, and various others, and their activities were subsidized by Department of the Ministry of Foreign Affairs, amidst a mixture of their own agendas. They were involved in donating money to the Red Swastika Society in mainland China, introducing the Society, and conducting psychic experiments. These activities, however, had little to do with the Red Swastika Society in mainland China and eventually merged with the Shinto circle "Kodo-Daikyo".

In other words, it is thought that these activities were an attempt to "revive" the Cooperation Movement left behind by the incident through the "Japanization" of the Red Swastika Society.

Keyword: Religion and Politics, Second Oomoto Incident, Daoyuan-World Red Swastika Society, Supporters' Association of World Red Swastika Society, Sino-Japanese war.

## 1. はじめに

1935年12月8日に勃発した第二次大本事件（以下、煩雑さを避けるため原則として事件と呼称）は、内務省警保局・特高警察が治安維持法違反や不敬罪などの容疑で大本教信者を大量に検挙し、教団を破壊した戦前期日本における最大の宗教弾圧事件として知られる。弾圧の理由は、大本教が「表面的には皇道を標榜しながら、実際には天皇を廃して王仁三郎を独裁君主とする結社を組織した」（永岡，2021，p.26）ことにあるとされている。

その結社としては、1934年に大本教が中心となって結成した最大の国家主義団体昭和神聖会をはじめ、そこに糾合されていった昭和青年会や人類愛善会などが挙げられるが、これらの団体は、大正末期から昭和戦前期にかけて続々と結成され、国内外において活発な宗教・政治的運動を展開した。そのうち、大本教の国際的活動を担ったのが人類愛善会である。当該組織は、大本教信者でなくとも参加が可能な「精神運動団体」として大衆の拡大を目指した団体であったが、そのモデルは、大本教が提携した中国の宗教団体である道院が組織していた、慈善団体世界紅卍字会にあった（玉置，2022a，p.65）。

道院とは、1916年頃、山東省濱縣知事であった呉福森と駐防衛長劉紹基が、祭祀壇を設け扶乩（自動書記。これにより神示を得る）を行っていたところに、“宇宙の主神”「至聖先天老祖」（以下、老祖と呼称）が降臨したことを起源として、中華民国期の1921年済南において正式に発足した民間宗教団体である。「青蓮教系教派同善社（清代中期青蓮教の流れに属する教派であり、1917年、彭泰栄が創立）の影響を受け」（宮田，2015，p.2）ていた道院は、扶乩や静座を活動の核心とし、「五教合一」（儒、道、仏、基、回の集合、統一）や、慈善による「救世」を主唱した。「内丹」と慈善が二本柱であった道院の活動において、後者を担ったのが、道院の“実践団体”として設立された世界紅卍字会である。道院の信仰を核として、赤十字社と同様に災害救援や、病院、学校、銀行などの経営など幅広い慈善事業を展開し、準公的機関的に中国全土、さらには外国でも活動した。また信者および会員には政治家や軍人、資本家などの有力者が多かったことから必然的に政治にも関与した。

この紅卍字会と大本教は、1923年関東大震災の際、南京領事で両団体の信者林出賢次郎の紹介によって出会い、すべての宗教は元来一つであるという「宗教統一」思想の合致を根拠に提携を決定したとされる。その後は、日中を越境して、宗教・慈善活動はもちろんのこと、黒龍会などのアジア主義者、関東軍、奉天軍閥、モンゴル王族など関係しながら「満蒙独立国」建国を目指す政治運動など多岐にわたる活動を行った。筆者はこれまで、これら一連の活動を「連合運動」（1923-1935）として位置づけ、その活動実態を一次史料によって詳細に明らかにしてきたが<sup>1</sup>、その期間を1935年までとしているのは、言うまでもなく冒頭に示した事件によって連合運動が崩壊し、道院・世界紅卍字会は日本での活動基盤を失ったからである。

ところが意外にも、日本における紅卍字会の活動は「世界紅卍字会後援会」として、事件後も細々と続けられていた。旧大本教信者で事件前は王仁三郎の秘書として満蒙工作に関わっていた大島豊が中心となって1938年頃に設立された同会は、「日満支親善」「大東亜戦争完遂」など日本の国策支援を目的として、主に中国本土の紅卍字会の慈善事業に対する寄付や、紅卍字会の紹介を行っていた。こういった活動は、対中国「文化工作」を主眼とする外務省文化事業部の助成を受けながら、中国本土の紅卍字会とはほとんど関係なく行われた。一方で、同会に主事として参画した同じく旧大本教信者で、同教の影響下にあった心霊研究団体菊花会を主宰していた心霊研究者小田秀人の存在は重要である。彼は、大正生命主義を背景とした時代に、人生に煩悶する青年として精神形成をし、やがてその煩悶が大本教的なユートピア・救済観とともに「心霊研究」へと繋がり、紅卍字会には扶乩によって惹きつけられた。世界紅卍字会後援会でも心霊実験を度々行い、「宗教的世界維新運動」を目指していた。ほかにも、中国で生まれ天才棋士として日本に渡った呉清源は、戦争の時代に日中に引き裂かれる自らの精神的拠りどころとし

て道院に入信し、戦後までその信仰が厚かったが、彼も大島・小田に勧誘され参加している。以上に見たように、この活動は参加者それぞれの政治・国家・戦争／宗教・心霊・信仰の要素が複雑に絡み合った、紅卍字会の「日本化」であったと考えられるのである。

この活動はこれまでほとんど研究されていない。對馬路人が、「大東亜戦争」期から戦後にかけて登場した篁道大教・靈宇の顛末に関連して触れているにとどまる（對馬，1991）。したがって、事件から戦後の日本紅卍字会設立までの間にどのようなことがあったのかは不明である。また、近年充実してきた紅卍字会の研究においても、世界紅卍字会後援会が発行したパンフレットが紅卍字会の言説として引用されることはあるが（宮田，2015，p.117）、世界紅卍字会後援会と中国紅卍字会とが本質的に別物であることは前提とされていない。

以上をふまえ、本論文での具体的な問題意識を述べておきたい。

第一に、紅卍字会の「日本化」である。既述のようにそれは、中国の宗教・慈善団体たる道院・世界紅卍字会が、実際の活動とイデオロギーにおいて日本の国策に利用されんとする過程および、広く日本の宗教的文化への融合を意味するが、それを辿ることで、思想的には、①総力戦体制構築のなかでの宗教の存在、②「日本化」によって「本質」から遠く離れる紅卍字会を、一方の実態面においては、世界紅卍字会後援会と日中戦争期の中国における日本の宣撫・慈善活動や、「大陸宗教」政策との関わりを明らかにする。

第二に、事件後の大本教信仰のゆくえである。世界紅卍字会後援会には大本教の多様な(旧)信者が参加している。国策への支援という観点からは、紅卍字会を日本の大陸政策に利用したいという目的を当初から述べており、それは大本教の「東亜経綸」思想を露骨に政治化させたものに映る。その一方で、心霊への関心も無視できない。事件前から続けられていた扶乩によって神示を得、それに従って「世界統一」を実現していこうという志向である。それは大正期大本教の特徴を示す「鎮魂帰神法」や「神人合一」的宇宙・世界・人間観によって支えられていた。すなわち、世界紅卍字会後援会は、大本教における宗教と政治の関係性を引き継いでいると考えられるのである。

これらについて考察する際、外務省史料やパンフレット、日記などの一次史料や回顧録などによって、多様なアクターの絡み合いの中での活動実態を明らかにし、①壊滅した大本教・連合運動との関係、②国策への関与（思想・活動）、③道院の教義解釈（大本教の影響も含めて）、④参加者の目的を詳細に検討していく。そのうえで、日本の昭和戦前・戦中期における宗教・信仰・心霊と政治・国家・戦争の複雑な絡み合いを浮かび上がらせたい。

## 2. 世界紅卍字会後援会の結成まで

### (1) 前史—連合運動の展開と第二次大本事件による崩壊

設立までの経緯を検討する前に、すでに若干述べたが、その前史となる連合運動を一瞥しておこう。

1923年の関東大震災に際して提携した大本教と紅卍字会は、組織・教義の両面で影響しあいながら、政治的には「満蒙独立」、宗教的には「宗教統一」の目的を創出して種々の活動を行い（玉置，2021a・2021b・2022b）、「満洲国」（以下、原則として括弧無し）の建国・統治にも関東軍や元奉天軍閥関係者らと共に関わった。特に1929年に「満洲」（以下、原則として括弧無し）紅卍字会と当地の大本教信者が中心となって結成した布教団「東瀛佈道団」の訪日は、両団体が組織・教義の両面で融合し、その「建国勢力」へと変貌していく契機となった（玉置，2022a）。その後、1934年には先述の昭和神聖会が結成されたことで、連合運動も否応なくその一翼を担うことになっていく。この活動は、大本教信者のほか、内田良平ら伝統的ナショナリスト、松岡洋右や一条実孝といった政

治家・軍人、満川亀太郎、倉田百三のような求道的超国家主義者らが参加・協力し、最終的には800万人とも言われる賛同者を得て海軍軍縮条約反対や天皇機関説排撃などの運動を行ったものである。

このように、表面的には国策に対する絶大なる支援をしてきた大本教であったが、繰り返し述べたように事件によって、その活動はすべて壊滅した。連合運動の中心地でありかつ、それによってその基盤が築かれていった満洲国においては、大本教支部は閉鎖され、それまで大本教と“融合”状態にあった紅卍字会は、「満洲国総道院世界紅卍字会満洲国総会」としてその関係を断ち切り「独立」した。以降、紅卍字会は日本の支配下にある満洲国政府下において慈善活動を行っていくが、日本国内において「邪教」とされた大本教と“融合”していた紅卍字会をどう扱うべきかという問題は残されていた（孫，2016，pp.156-157）。

中華民国（満洲国領域を除く）においては、慈善活動自体に大きな変化はなかったが、対日関係の点では複雑な状況となった。というのも、大本教は、満洲国だけでなく中華民国の紅卍字会とも良好な関係にあり、特に北京に置かれた紅卍字会の本部「中華総会」や、山東省済南にあった道院の「済南母院」などとは強いつながりを持っていた。しかし、大本教が壊滅したことによって中国の紅卍字会と日本のチャンネルは閉ざされた。このような状況下において日中戦争が勃発すると、日本軍占領地（南京や済南を中心）における紅卍字会は、遺体埋葬や被災民救護などの戦時救援活動のみならず、その幹部たちが日本軍の影響下にあった各地の治安維持会の要職に就くなどし、日本の支配に様々なレベルで「協力」したが（高，2011，pp.224-245）、現地派遣の陸軍ではさらに、紅卍字会をその作戦遂行と統治に、特に「民心収攬」の観点から利用したいという声があがるようになる<sup>2</sup>。

日本国内には、もともと東京に組織されていた紅卍字会日本総会を中心として、全国の大本教支部にあまねく紅卍字会支部が併設されていた。紅卍字会日本総会は、1929年に設立され、東京市四谷区愛住町にあった<sup>3</sup>。会長・出口王仁三郎、顧問・頭山満、責任会長・内田良平、理事・出口日出麿、出口宇知麿という体制で運営された。その規約には「本會ハ京都府龜岡町天恩郷二行總會ヲ置キ各地ニ分會ヲ置キ總會ノ事務ヲ處理ス」、「本會ハ人類愛善會ト提携ス」とあり（内田，1931，pp.115-116）、実質的にはほとんど大本教の組織であったが、黒龍会もこれに深く協力していた。特に責任会長を務めていた内田良平は、『滿蒙の独立と世界紅卍字會の活動』を著していることに端的に象徴されるように、紅卍字会を利用して「滿蒙独立国」建国を推進しようとしていた。しかし、事件によって紅卍字会日本総会と支部が全て廃されたことは、連合運動に関係していた政略的アジア主義者らにとってみれば、中国の紅卍字会と日本の関係の断絶を意味していた。そういった状況のもと、この紅卍字会日本総会を再興しようという動きが出てくるのである。

しかし、これから見ていくように、その動きには政略的アジア主義という政治的動機からのみではなく、他にも様々なアクターが複雑に絡み合っていたのであり、政治的観点からのみでは、この運動の一側面を捉えるに留まる。したがって本論文では、設立経緯を考察する前段階として、その中心的存在であった三人、すなわち、大島豊、小田秀人、呉清源と紅卍字会の関係や、その背景にあった思想をたどることで、後援会の存在を多角的かつ立体的に見ていきたい。

## (2) 日本における紅卍字会再興の意図—大島豊・小田秀人・呉清源と紅卍字会

### 1) 政治主義的宗教としての紅卍字会—大島豊

時は1938年6月8日である。先に名前の出た、善隣協会理事を務めていた大島豊は、外務省に対して次のよう

な申し入れを行った（史料中の傍線は引用者。以下同じ）。

支那一般大衆ニ對スル宣撫竝人心収攬ノ爲ニハ宗教ニ依ルコトヲ上策トナストノ見地ヨリ道院及紅卍字會トノ連絡ヲ圖ラントスルモノニシテ軍側ニ於テモ其ノ必要ヲ認メ之カ實行ヲ希望シツツアリ過般林出書記官歸朝ノ際同書記官、安東秘書官等トモ本件話合ヒ其ノ賛成ヲ得漸次各方面トモ協議ノ上實行運動ヲ進メントシツツアルモノナリ・・・差當リテノ事業トシテハ東京ニ紅卍字教ヲ設ケ支那總會（北京）滿洲總會（新京）ト聯絡シ漸次提携シ行クコト致度シ目下東京ニ於テハ東京帝大宗教哲学科出身ノ小田文學士ノヲシテ本件籌備ニ當ラシメツツアリ<sup>4</sup>

この史料によれば、大島は、外務省の指示・支援のもと、大陸での「宣撫竝人心収攬」に紅卍字会を利用するために「東京ニ紅卍字教ヲ設ケ」、紅卍字会中華總會・滿洲總會と提携したいと述べており、当初から国策に沿う意向が明確であるように見える。その一方で、後述する後援会設立にも関わった棋士吳清源は、「(大島は一引用者) 大本教に居るときから紅卍の信者であったが、大本教が弾圧された結果、大陸の紅卍会と日本の紅卍の信者との交流が途絶えた状態にあるのを何とかしたいと考え」、「紅卍の北京総院に行き、紅卍会日本支部を結成することについて、相談をもちかけた」と述べており（吳，1997，p.101）、大島が道院の信仰によって紅卍字会日本總會を設立しようとしたとしている。それでは、大島と紅卍字会との関係はどのようなものであり、そもそも大島とはどのような人物であったのだろうか。

大島豊（1899，1900？-1978）は、もともと東京帝国大学（法学部）在学中の1920年に大本教に入信し（皇道大本本部，1931）、大正中期には大本教の東京布教の嚆矢となった「確信会」に所属して活動していた（大本70年史編纂会編，1964，p.510）。第一次大本事件（1921）の後、「大正維新」の理論的支柱であった浅野和郎を批判して（松本，2012，p.133）、教団内で存在感を高め、昭和初期には王仁三郎の秘書を務めるようになる。当時は主に東京の牛込支部に在籍し（皇道大本本部，1931）、「東瀛佈道団」が訪日し上京した際の接待や、滿洲事変に際しての溥儀擁立工作など、連合運動の政治的工作に関わり（大本70年史編纂会，1967，p.108）、道院にも入信している。

その後事件前に、滿洲国における政治運動をめぐって王仁三郎と対立して大本教を脱退したが、当時大本教幹部だった出口宇知麿によればその事情は次のようなものであった。大島は「軍部やその他との接触の多い方でしたので、もっと関東軍に密着して、宗教による本当のいみの宣撫工作を、王仁三郎先生にやらせたらいいという考え」を持っており、それを王仁三郎にすすめたが、王仁三郎は「宗教的な面で民族とつながってゆくのでなかったら、うまくゆかない」と自らは滿洲国では宣撫活動は行わないことを主張し、大島の提案を蹴った。これにより「大島さんは大本をはなれた」（大本70年史編さん会事務局編，1962，p.279）。しかし、脱退後も滿蒙については一貫して関心を持ち、善隣協会理事を務めている。先の外務省への申し入れは丁度それを務めていた時期に当たるが<sup>5</sup>、では大島が敢えて紅卍字会を利用しようとするのはどういった背景によるものなのであろうか。

この時期の大島は、日本の大陸政策に資するための宗教の必要性を訴えていた。特に彼が理事などを務めた善隣協会は、対モンゴルの「文化工作」を担う団体であったことから、宗教工作には力を入れていた。自らが直接関わるモンゴルにおいて、極めて大きな影響力を持っているチベット仏教、イスラームを念頭に、「同情と愛とを以て是を善導していく事が、日本の宗教家の大なる使命ではなからうか」（大島，1939，p.178）としたうえで、次のように述べている。

日本が大陸に進展するには、宗教工作が如何に大事なことであるかと云ふ事を私は常に誰にでも話して居るのであります。日本の宗教家が今迄のやうに内に居つて、お葬式とか或は法事とかと云ふやうな事に没頭して居る時ではもうないのであります。須く大陸に進出して参りまして、大陸の宗教を指導誘掖して行くと云ふ決心と努力を以て大いにやつて貰ひたい。又やるべき使命があると私は平素から考えて居るのであります（大島、1939、p.178）。

「宗教工作」の重要性と同時に、「日本の宗教家」が「進出」するよう述べているが、これに対する日本諸宗教の現状については、「現在日本にある宗教教團なんて全部大陸教化の資格はないよ」（『中外日報』、1940c）とする。

一番大きな體系を持つ佛教教團はどうだネ、ありや葬式の道具になつてゐるぢやないかネ、基督教はなんだ、何時までたつても個人の問題を抜けきつてゐない、神道にも實際どれだけの信仰があるんだ、日本の宗教界は今日大改革を要する、……信仰に燃える情熱の迫力を持つてもらひたいさもなくちや僕は全然日本の教團に期待を持たない（『中外日報』、1940c）

すなわち、国策への協力こそが日本宗教の本来あるべき姿であり、それこそが信仰である。しかし実際は各宗教がそれぞれの矮小な問題にとらわれて、まったくその体を成していない。だからこそ重要視されねばならないのが、大島にとっては国策に合致する紅卍字会であった。

今僕の観る所では世界紅卍字會の運動が一番清新澆刺としてゐるやうだ、その信者はまだ大陸に於て四、五百萬ではあるが必ずや此教團は擴大し將來の大陸人を支配する宗教となると思はれる（『中外日報』、1940c）

大島は大本教信者として満蒙工作に関わっていた1929年に紅卍字会と出会った。後述するように小田秀人とともに大本教にて扶乩を見、その後、紅卍字会北京總會を訪れたのである。そこで行われた扶乩で、北京總會は大島を歓迎せよ、という意味のことが示され、大島はいたく感激したという。その時のことを次のように回顧している。

排日の眞只中で打倒帝國日本とか、經濟絶交といふやうなビラが至る所に貼られてゐた時である。……（北京總會幹部が一引用者）日本と支那が一緒になるといふ事は世界平和の最初の出發であるといふやうな事を言はれたそれで大變感謝し、之は非常に良い教へだ……何うしても日本人も支那人も精神的な道によつて一致しなければならぬ、その道は道院紅卍字會だ（『中外日報』、1940e）

排日運動が苛烈な中でも自身を歓迎してくれた道院の教えとは、日中両国の提携と世界平和への「精神的な道」であり、それと皇道が重なるのだと大島は得心したらしい。さらに、

教義そのものが萬教歸一で佛基道儒回の五大宗教を一丸とし宗派を立てて互ひに排斥するやうなことがなく潭然一體になつて働いてゐるも一つは大陸の傳統に即應するフーチ（=扶乩一引用者）を中心として行動し人間的な謀ひを交へていない（『中外日報』、1940c）

と述べている。紅卍字会の主眼を扶乩と「五教合一」論にも置いていることが分かるが、こういった見方は、内田良平がかつて論じたような紅卍字会像にかなり近い。内田は、扶乩＝神示に絶対的に服従して活動する（と彼が思っていた）宗教的慈善団体としての紅卍字会を、満洲国建国さらには中国全土を国民党政権から「独立」させる際に利用すべきと主張したが（内田，1931，pp.117-119、詳しくは後述）、大島はその線をなぞるように「大陸教化」における紅卍字会の重要性を説いているのである。つまり、事件後とはいえ大本教・連合運動時代の紅卍字会像は、当然のことながら大島にあって大きく影響している。そのことは大島が明らかに政略的アジア主義者であったことを意味する。そしてこういった大島の考えは当然、単に日本の「支援」による「モンゴル独立」を成就させるためだけでなく、「大東亜共栄圏」の確立に繋がっていた。

われ／＼は、もはや一島帝國の國民ではない、大陸を抱擁し、南方諸地域をも包攝し、更に全回教圏をも指導してこれを一體として經營し、保護、指導の任を負担すべき（大島，1941，p.3）

その目的を達するには、紅卍字会をはじめとした「宗教工作」を無視することは出来ないのである。紅卍字会には中華民国の政治的有力者が多く所属し、中国全土に広がっていたことから、大島にとってはその中心を占めるべき存在であった。

以上を踏まえれば、大島は、紅卍字会による運動を活発化させることで大陸政策を円滑ならしめると同時に、日本にもその支部を設けて紅卍字会の活動を拡大させ、かつ「支那總會・滿洲總會」とを提携させることで、「精神的結合」をさせようと目論んでいたことが分かる。それは、かつて連合運動が、「宗教統一」「アジア主義」を軸として、独自の宗教的言説を説きながら運動を展開し、満洲国を中心として、「東亜」を宗教的・精神的に統一し、やがて「世界統一」へと至らしめるとした理想と、部分的に一特に政治的方向性において一重なっている。大島は、ここで宗教的言説は説いていないが、それは彼の言う信仰がすでに「大東亜共栄圏建設」という「政治」にすり替わっているからであり、そこでは「政治」に「燃える情熱」を持つことこそが、宗教となる。こういった大島の言説は、事件後とはいえ、大本教における宗教と政治の微妙な関係性が、政治の一方に振り切れたケースとも言えよう。

## 2) 心霊研究・ユートピアへの「道」としての紅卍字会—小田秀人

大島豊に加えて、もう一人重要な人物がいる。それは、本節冒頭の史料に「東京帝大宗教哲学科出身ノ小田文學士」として出てきた心霊研究者小田秀人である。彼も大島と同じく後援会の発起人として、後にその主事を務めることとなるが、その人物像をおさえておくことは後援会における様々なアクターの絡み合いを考察するうえで非常に重要である。ただ、本論文では「心霊」について深く論じる余裕はないので、以下では小田の回顧録に基づきながら、心霊研究と大本教・紅卍字会との関係性を素描しておきたい。

小田秀人（1896-1989）は、関東一高在学中の青年期に、藤村操に共感して自殺を試みたり、その悩みを散文詩にあらわしたりするような典型的煩悶青年であった<sup>6</sup>。卒業後、東京帝大に入学したが程なく退学し、哲学をやりたいと考えて京都帝大に入学し直し<sup>7</sup>、旺盛な詩作活動を行っていた<sup>8</sup>。その在学中に執筆した書籍<sup>9</sup>がきっかけとなって心霊に関心を持ち、大本教を訪ね（1928年頃か）、1929年2月20日に入信した（皇道大本本部，1931）。そしてそこでの講習で偶然出会った女性から綾部の心霊研究の場を与えられることとなったが、ある日、同じくその研究場に通っていた尼僧が危篤になったと、その尼僧の同僚の女性から電報を受け、当時大本教では禁止になっ

ていた鎮魂帰神法による病氣直しを頼まれた。小田は初心者ながらそれを習得し成功させたという。その経験は、小田を「心霊の実在にめざめ」させ、「唯物論に対抗する新たな新しい真理を確立して思想的革命を断行したいと思」わせしめるものであった(小田, 1969a, pp.37-38)。それを実現させるため小田は、すでに大本教を脱退し東京で「心霊科学研究会」を開いていた浅野和三郎に出会い、その仲間である霊媒師亀井三郎<sup>10</sup>から持ち掛けられて、心霊研究団体菊花会を1930年に創設した<sup>11</sup>。この団体では機関誌『心霊知識』を発行し、活発に心霊実験を行っていたようであるが、程なくして財政難に陥り翌1931年には活動停止となった(小田, 1967, pp.28-32)。なおこれら1929年以降の活動は、大本教信者としてのものでもあった。当初は綾部に居たが、1930年途中からは宣伝使(職員)となって広島支部に赴き(「大本時報」, 1930)、そして翌1931年から事件の1935年までは、大島と同じ東京の牛込支部に「宣伝使試補権参教」として所属し、教団活動を支えていた(皇道大本地方宣傳課編, 1935, p.158)。

さて、小田と紅卍字会の出会いは、紅卍字会の「東瀛佈道団」(1929年から1930年にかけて訪日)が、大本教亀岡天恩郷に来た時であった。小田は当時綾部で大本教信者として心霊研究をしていたが、亀岡で開かれた「書画壇<sup>12</sup>」に出席を許され、そこで当時大本教信者であった大島豊、笹目恒和らとともに扶乩を初めて目にしたという。

当日は今次の訪日に当って特に功労があったと認められる幹部級の人十数名に対して書画を賜われることになっていたらしい。書画を賜われるのは本人の希望によるのではなく、予じめ幹部の間で選考して決められたものに限られたようであった。この選に洩れたものが勝手に申し出てよい筋合いのものではない。従ってわれわれ新参ものにそんな割当のあろうはずはなかった(小田, 1968, pp.35-36)。

しかし、小田は幹部のみが「大使命を授かっていると気負って」、「神様じきじきの書画を頂」いており、その他の人はみな「頂くべきものを頂か」ない状況に腹を立て、自分たちも欲しいと思って「書画を賜わりたい」という内容の「直訴状」を(紅卍字会幹部の王天誠のすすめによって)書いた。そしてそれを誰にも見せずに扶乩の行われている壇に(王が)供えた。すると壇の最終盤になって、小田らにも書画が「下賜」されたという(小田, 1968, p.36)。小田はこの事を次のように述べている。

それにしてもわれわれの名も性格も知らず、日本語も解しない纂方達が、われわれの直訴状の内容をどうして感知し、われわれ一人一人の性格や運命に適合した文字や画を、何の渋滞もなくどうして表現することができたのであろうか。今もって頭をかしげしめるものがある(小田, 1968, p.36)。

この話の真偽はともかくとしても、小田が扶乩によって紅卍字会に興味を持ったことは間違いなさそうである<sup>13</sup>。しかもそこには当時同じく大本教信者であった大島豊も共に参加していることから、すでにこの段階で彼らには扶乩の「神秘」と大本教教義について、ある程度共通の認識があったのではないかと考えられる。

ところで、小田は常に、「心霊現象があるんだという確証が得たい」(小田, 1970, p.42)と考えて心霊研究を行っていたが、それは「ただ心霊が好きで心霊を研究するというのじゃなく」(小田ほか, 1978, p.73)、

心霊があるとすれば人間はどういう風に生きなければならない、人生観はどういう風にするんだ、社会大衆の考え方、国家の考え方はどうあるべきだ、心霊があるとないとでは随分違うじゃないか、そこへ結論を持ってゆく(小田, 1970, p.42)

ためのものであった。すなわち小田は、心霊研究は単に趣味的なものではなく、人生・国家・世界観にもつながるものと考えていた。少しく説明的に言えば、心霊の存在を科学的に証明することで、目に見えない人間の「内なる生命力」（小田はそれを「神」と呼ぶ）を認識し、「人間の生きていく道」（小田ほか，1978，p.73）を確立していくということである。そのことは、彼がかつて煩悶青年であったことと無関係ではないだろう。人生の悩みが、心霊研究につながり、それがやがて国家・社会の問題へと接続されていっている。

総じて、小田の紅卍字会への関心と実際の関わりは、扶乩に代表されるスピリチュアリティ的要素が極めて大きかったと考えられるが、小田が大本教信者・職員であったこと、さらには浅野との関係をも踏まえるならば、小田が「神人合一」「霊主体従」を根本に持つ大本教の政治的思想、すなわち「東亜経綸」や「世界統一」を有しており、紅卍字会はそれに奉仕する宗教と捉えていたと思われる。そしてこれらが、彼の青年期の煩悶とつながっていたとするならば、小田はユートピア・超国家主義者として、「神の国」（小田，1969b，p.37）の実現をめざし「宗教的世界維新運動」（清水，2007，p.115）を行っていた人物であったと言えるであろう。

### 3) 道院信仰と中国・日本という「祖国」—棋士呉清源

以上に見た大島豊、小田秀人に誘われて、後援会に関わることとなった人物が呉清源（1914-2014）である。

呉は中国福建省に生まれた囲碁棋士<sup>14</sup>であり、1928年に天才少年棋士として来日して以降、新布石をもって圧倒的な強さを誇り、昭和日本囲碁界の頂点に長く君臨した。彼は、道院に対して厚い信仰を持っていた。そのきっかけは、1935年10月1日「秋の大手合の前日（呉，1997，p.64）」であった。夜中に突然「接霊状態」（呉，1997，p.64）となり、「翌日になっても霊が憑いている感覚」（呉，1997，p.65）が続いたため、手合いを病欠した。その時、呉には「天津に帰れ、天津に帰れ！」（呉，1997，p.65）という声が「神様」から聞こえたという。呉は次のように記している。

・・・丁度福田さん（正義・棋士—引用者）と手合をする前の日に脳貧血で倒れて、そのまま天津へ歸つたときが、この時分であつた。

天津には「庸報社」といふ新聞があつて、其處の社長は昔から紅卍の信者であると聞いてみた。私は前にその人の論文を読んでみたものだから、訪ねて行つて、色々紅卍の話聞いた。・・・私は李社長の話を聞いてみるうちに紅卍の教へに打たれて、天津の紅卍會に入つて修養することになった（呉，1942，pp.183-184）。

当時、天津の南開大学には呉清源の次兄、呉炎が住んでおり、彼は「庸報社」でアルバイトをしていたため、清源はすぐに李社長を紹介してもらったそうである。そこから道院に入信し、修行（静座）の日々が始まった。しかしその途中、碁の対局があるためにどうしても日本へ帰らなければならなくなった。そこで本来は「百日の修行を六十日間に短縮して」（呉，1997，p.71）もらい、1935年12月の初頭に帰国した。到着後、下関港から東京に戻る途中に、綾部の大本教に王仁三郎を訪ねる予定であったが、時あたかも12月8日、第二次大本事件が勃発したことでそれは実現しなかった<sup>15</sup>。

少し話が先に進むが、その後の1938年、日本に戻っていた呉は打ち続く対局による疲労から結核となり、富士見療養所入院していた。そこに、大島豊と小田秀人が紅卍字会日本總會創設の件で協力してほしい、と訪ねてき

た（呉，1997，p.100）。それは大島が、（おそらく1937年か1938年ごろ）「紅卍の北京総院に行き、紅卍会日本支部を結成することについて、相談をもちかけた」（呉，1997，p.101）ところ、「日本には呉清源という紅卍会の修方がいるから、その者と会ってよく相談せよと言われた」ことによるという（呉，1997，p.101）。呉は当時すでに著名な棋士であっただけでなく、中国人でもあり日本人でもあるということ、「日支親善」「精神的融合」に合致する紅卍字会、という「理想」には、ある意味で非常に都合がよかったのであろう。また当地の紅卍字会信者との人脈もあり、コミュニケーションも取れることから、大島らは協力を仰いだと考えられる。

しかし、先に天津に行った際、「敵国日本から来たというだけで学生たちから白眼視され、兄と一緒にないと、いつ袋叩きに合うかわからないような状態」（呉，1997，p.66）を経験していた呉清源は、むろん、そんな日本人中心の「平和の理想」を簡単に受け入れてはいなかった。日中戦争当時、次のように文章を書き残している。

・・・大分日支紛争のことが賑やかに出てゐる。末は、どうなることかと人並に心配が起らないでもない。戦争と言ふことは、結構な話ではないと思ふ。結構な話だ、と思ふ人は一人もあるまいが、とり分け私のやうに、支那に生まれていまでは日本人となつてゐる者とすれば、日支が争ふなどはまことに以て、有難くないのである。なうことなら、平和であつてほしいのが山山である。・・・なるほど、兵を以て攻め合ふのであるから随分激しく戦はねばならないのであうが、目的とするところは平和にあるのであるから、力を盡せるだけ盡して、結果は兩國の損害がなるべく少いのを祈るのである（呉，1942，p.73）。

戦争によって、日本と中国に引き裂かれた複雑な心境が綴られている。目指す「平和」はどこにあるのか。果して日本人の言う「日支親善」とはそれに値するものなのか。「日中の戦争が大東亜の平和のための戦いであるという日本の宣伝を信じつつも、複雑な思いが心をよぎることを禁じ得なかった」（呉，1997，p.76）呉は、そのようなことを考えながら療養所近くの富士見駅で、中国への「出征兵士の送別風景をいつまでも眺めていた」（呉，1997，p.76）。

呉の純朴な思いは日中戦争を早く終らせ、真の「平和」を実現してほしいということであつただらう（呉，1942，pp.106-109）。それでも、自身の長兄が「満洲国人」として満洲国宮内府の官吏となり、次兄が中国で仕事をし、自らは日本人となつて棋士であることを踏まえて、「興亜のために日滿支は親しく手を繋ぎ、遅しく晴れた路を歩かねばならない」（呉，1942，p.141）と宣言しなければならなかつた。そのことは、呉清源が、日中戦争の中で「日支親善」「共存共栄」「八紘一宇」といった日本の国策イデオロギーと、「中日友好」「和平友好」「世界平和」という彼の信仰的希望を混同し、その矛盾と葛藤の中に身を置いていたことを意味している（王，2010，pp.125-126）。いずれにしても彼にとっての道院信仰は、日中戦争の時代に、中国人である日本人として、日本に生きるための大きな支えであつた。

さて、大島・小田から依頼を受けた呉は、「棋士の仕事があるし・・・そのことだけにかかわりきるわけにはいかな」（呉，1997，p.101）かつたが、「支部を作る以上は修行の場である道院を備えたきちんとしたものを作らなければならない」（呉，1997，p.101）と意気込んで快諾した。その「修行の場」の言葉に現れているように、呉にとって、（戦前・戦中の後援会や戦後の日本紅卍字会の活動も含めて）紅卍字会とは、やはりあくまで純粋な信仰による存在であつたと言えるだろう。それをあらわす呉の言葉を引用しておこう。

紅卍會の精神を一言で言へば、一つの信仰と一つの善行とがたへず平行してなされなければならないといふことである。信仰が深まれば深まるほど善行は擴く、高くなければならぬのである。私の信じてゐるこの

教へが、今の私には一番大きな喜びであり、この教へを持つて、私は墓場まで喜んで行きたいと考えてゐる（呉，1942，p.183）。

後に触れるように、呉は篁道大教・璽宇や戦後の日本紅卍字会にも関わっていき、その活動に変遷は見られるが、何か政治的意図によってではなく、「精神的な悩み」が元となって道院に入信し、「世界平和」を求めてその後も一貫して純粋な信仰を追い求めていたと考えられる。その意味では、大島のような紅卍字会の政治的利用については考えておらず、また小田のような心霊への関心から紅卍字会日本總會設立に賛同したわけではない。すなわち、呉の後援会への参加は、「一つの信仰と一つの善行」を広げるといふ、宗教的意志によってのものであり、日中戦争を中心とした当時の状況における、「平和の希求」の意志であった。

### (3) 外務省文化事業部への申請—「紅卍字会日本總會」再建と「宣撫活動」という目的

ここまで見てきた通り、後援会の中心的存在となる大島豊、小田秀人は、事件以前から大本教信者同士として知己となっていたが、それぞれの関心の中で紅卍字会に対する認識を独自に深めていった。事件前に大島は大本教を脱退するが、善隣協合理事として引き続き満蒙工作には積極的にに関わり、一方の小田は事件まで大本教牛込支部の職員を続けながら、その後は東京を中心に様々な人物と心霊研究を続けていた。他方で呉清源は日中を跨ぐ棋士として、道院信仰を深くしていた。

さて、1930年代中盤頃の日本は深刻な不況からいまだ抜け出せず、国民生活は疲弊の一途をたどっていた。その打開策でもあった満洲事変や満洲国建国は「成功」したものの、結果的にはそれによって国際的孤立を深めた。そのような状況になんら有効な手立てを持たない政治家に対し、明治晩期から大正期にかけて思想形成をしてきた超国家主義者らは、様々な信仰に基づく「一君万民」のユートピア的思想を背景として、血盟団事件や二・二六事件などテロやクーデター未遂事件を引き起こした。政府の思想弾圧は、国内の社会不安が高まる中で、その極みに達しつつあった。弾圧は、左翼やいわゆる自由主義者だけでなく、右翼、超国家主義者にまでおよび、大本教もその中で壊滅させられたのである。

その後、1937年に日中戦争が勃発する。紅卍字会はその戦場において、以前と変わらず被災民救済や遺体埋葬などの慈善活動を続けた。こういった活動は、満洲事変の際もそうであったが、基本的には日中国民の別なく行われ、日本側はそれを「中正」であるとして高く評価し、また戦争遂行におけるその積極的な利用をも考えていた。その状況下で、特に大島と小田の二人にあって、紅卍字会は宗教・信仰・心霊と政治・国家・戦争の関わりという点で、事件以前から彼らにあった「世界統一」的志向と共に依然として注目されるべき存在であった。大島が紅卍字会日本總會設立を発起したのはこういった経緯によるものだったのである。

1938年6月、大島豊が「支那一般大衆ニ對スル宣撫竝人心収攬ノ爲」に、紅卍字会日本總會を組織したいとして、外務省に申請をしたことはすでに述べたが、まずもって重要なのは、大島が外務省文化事業部に申請した事実である。文化事業部は、1923年に設置された「対支文化事業」「東方文化事業」がその前身で、主に中国に対する文化教育（在日中国人留学生・在中日本人学生への学費の補給、北京研究所のほか東京・京都の東方文化学院の設置など）を担った。満洲事変・日中戦争以降は日本による単独の文化事業となり、「対中文化工作」の側面が強くなったとされるが、大島自身が理事を務める善隣協会も助成を受けていた。すなわち、善隣協会と同じく、日本の「文化工作」に紅卍字会を合流させ、公式な大陸政策に抱きこもうとしたのである。その意図のもと始まった構想は、紆余

曲折を経ることとなる。以下ではその経過を詳細に辿っていこう。

建議当初における紅卍字会日本総会の趣旨は次の通りであった。

- (一) 防共協定ノ線ニ沿ヒ世界ノ凡有宗教的活動ヲ助長復活セシメントスル我思想国策ニ合致スルコト
- (二) 其ノ思想信仰ノ原理的一致ニ依リ特ニ日支兩民族ノ宗教的融和親善ニ貢献スルコト
- (三) 日本在住及日本来訪ノ中國人ニ對シ精神的安心立命ノ本據ヲ與フルコト
- (四) 支那一般民衆ニ對スル宣撫工作ノ重要ナル「ルート」トシテ役立つヘキコト<sup>16</sup>

すなわち、①世界のあらゆる宗教的活動の復興、②日中両民族の宗教的融和親善、③中国人の精神的支柱とすることを理想的建前とする一方で、④「防共協定ノ線ニ沿」った国策のための「宣撫工作」における有力な「ルート」としたい、というのが「趣旨」の本音である。日中戦争がその念頭に置かれているのは言うまでもない。

これを大島が外務省文化事業部に提出したのち、1938年6月9日、大島と外務省の山口書記官らが出席して「第一回打合會」が開かれた<sup>17</sup>。ここでは大島の申し入れに対する外務省の反応を見ておこう。まず、その政治的動機については、

日本側ニ於テ本會ヲ利用セントスル動機ニハ多分ニ政治的意義含マレ居ルヘキモ之ヲ表面ニ表現スルコトハ今回ノ擧カ同會竝ニ支那側一般ニ與フル印象ヲ考量シ嚴ニ慎ムヘキ<sup>18</sup>

外務省は、その政治的意義は認めるが、紅卍字会を利用したい動機は、それが中国側に対して悪印象を与える可能性があるので、あくまで「表面上純然タル慈善事業ノ機關トシテ之ヲ助成スル<sup>19</sup>」べきであると主張した。

次に、その宗教的動機については、「宗教的活動ヲ高調スルコトハ殊ニ世界紅卍字會及大本教從來ノ關係ニ鑑ミ極メテ機微ニ亘ルモノ<sup>20</sup>」があるため、

其ノ宗教的動機ヲ特ニ高調シ且宗教運動トシテノ活動ヲ為スコトハ成ルヘク之ヲ避ケ今回ノ擧カ主トシテ  
(イ) 世界紅卍字會支那總會力從來日本ノ災害ニ對シ示シ來リタル厚意ニ報ユルト共ニ (ロ) 純然タル慈善事業ノ見地ヨリ戦禍ニ悩ム支那民族ヲ救済スルコトニ在ル旨ノ建前ハ堅持ス<sup>21</sup>

とし、事件後の現在、連合運動という過去、また大島・小田が信者であったことに鑑みて、宗教性は除き、大本教再建運動と取られないようにしなければならないとしている。

さらに、日中戦争中の現地陸軍の紅卍字会利用についても議論になっている。外務省は「稍モスレハ功ヲ急カントスル虞アル現地軍側ノ行動ヲ適宜調整スル爲現地ニ於ケル本會活動ノ統制指揮監督ハ出來得ル限り之ヲ林出書記官ニ一任スル<sup>22</sup>」としているが、これは現地陸軍が、戦闘中に中国紅卍字会をその支配下に強制的に置き、直接的利用をしないようにするために、かつて連合運動のきっかけを作り、紅卍字会中華總會幹部からも信頼の厚い林出賢次郎<sup>23</sup>に、日本側の紅卍字会に対する態度を一任せたいという外務省の意図である<sup>24</sup>。

「第二回打合會」は、1938年6月24日に開かれた。出席者は次の通りである。①発起人：遠藤柳作・高木陸郎・大蔵公望・大島豊・小田秀人、②陸軍：岡田少佐（陸軍省）・片山大尉（参謀本部）、③外務省：安東書記官・山口書記官。その内容は略次のようなものであった。

六月二四日工業俱樂部ニ於テ世界紅卍字會ニ關スル第二回打合會開催セラレ・・・席上大蔵公望男ヨリ資金獲得ノ關係上世界紅卍字會日本總會ノ設立ヲ目下設立行惱中ノ東亞同胞協會ニ結ヒ付クルコトヲ提議シタルカ結局 (一) 世界紅卍字會日本總會ノ設立ヲ見合セ世界紅卍字會中華總會後援會ヲ組織シ支那ニ於ケル同總會ノ活動ヲ後援スルノヲ採ルコト (二) 基金竝ニ活動資金ノ募集ニ付テハ一口十圓トシ同會活動後援ニ關心ヲ有スルモノヨリ出來得ル限り之ヲ募集スルコトニ意見ノ一致ヲ見大島氏ニ於テ一應世界紅卍字會中華總會北京關係者ノ意見ヲ求ムルコトトナレリ<sup>25</sup>

大枠として重要なことが決定されている。すなわち、「紅卍字会日本總會」再建は見合わせ「紅卍字会中華總會後援會」という形で創設する点である。吳清源は、「宗教の後援会というのはおかしいもので、いまもって聞いたこともない」（吳，1997，pp.101-102）と振り返っているが、それは、後援会というその名称から分かる通り、中国紅卍字会の正式な支部とはならなかったことを意味する。「總會」とは紅卍字会が各国の首都に置くと定めている組織であるが、外務省側は、やはりそれを自らの支援のもとに創設することは、直接的政治利用と取られると考えたのである。また以上の決定は、紅卍字会を宣撫活動に直接利用しないことを意味したが、それを理由に、陸軍省は「直接右ニ役立つモノナラサル以上本會ニ對スル軍側援助ハ困難<sup>26</sup>」と主張し、この一件から半ば離脱した。

ここで、今回出席した人物の中で大蔵公望（1882-1968）に注目しておきたい。大蔵は、満鉄理事や貴族院議員を務めた人物であるが、ソ連を中心として日本の大陸政策について様々な研究をしていた。自ら「大蔵研究室」を立ち上げ、1934年には日本の国策策定に大きな影響力を持ったシンクタンク「国策研究会」創設にも関わっている。その後、1935年に「満洲移住協会」理事長、1938年に企画院管轄の「東亜研究所」副総裁を務めるなど、精力的に活動していた（内政史研究会・日本近代史料研究会編，1973，pp. ii - iii）。おそらく「第二回打合會」には、国策研究会ですでに知り合っていた大島豊か、あるいは大島に勧誘され参加したと推測される遠藤柳作などに請われたのであろう。大蔵はその席上、「東亞同胞協會ニ結ヒ付クルコトヲ提議<sup>27</sup>」したというが、彼は自身の日記に「取敢ず紅卍字研究会を設立す可き」（内政史研究会・日本近代史料研究会編，1974，p.24）ことを述べたと書いており、自らの政策研究活動の枠内に紅卍字会日本總會の設立運動を考えていた。さらにこの「打合會」後の1938年7月1日には、大蔵が常任理事を務める国策研究会の外交・国防をテーマとする「第一研究委員会」の「アジア民族問題研究委員会」において、「紅卍字教の理想と任務」（国策研究会編，1939，p.10）と題された「大島、小田二氏の紅卍字会の話を書き」（内政史研究会・日本近代史料研究会編，1974，p.24）ことがあった。大島らは国策利用としての紅卍字会をアピールしていたのである。

1938年7月8日、さらに「第三回打合會」が開かれた。出席者は、①発起人：遠藤柳作・大蔵公望・高木陸郎・大島豊・小田秀人・藤沼庄平（前警視總監）、②外務省：安東書記官・山口書記官となっている。陸軍は、前回の「打合會」の結果から参加しなかった。このうち、発起人の藤沼は次の史料に見えるように、第一次大本事件において京都府警察部長として関わった人物である。

二、世界紅卍字會中華總會ノ宗教思想（道院）ニハ全然觸レス専ラ時局ニ關聯スル同總會ノ社會慈善事業ヲ後援シ以テ支那民心収攬宣撫ニ資スルニ努ムル

三、大本教カ先般同總會ヲ利用シタル關係アリ現ニ大本教再建運動ニ従事スルモノニシテ同總會ヲ利用セントスルモノアリ此點ハ殊ニ警戒スル要アルニ鑑ミ先般大本教彈壓ニ當リタル藤沼庄平氏ヲ理事ニ加フルコトトシ同氏ノ承諾ヲ得タルコト<sup>28</sup>

この会議で外務省が後援会の助成をすることは「大体決定<sup>29</sup>」した。その組織の内容は、道院の宗教思想には触れず、紅卍字会の慈善活動を後援する、大本教とは全く関係の無い団体、というものであったと言えよう。この決定を受けて、1938年7月22日には、後援会発起人による会合が開かれ、正式に「定款を可決」し、大蔵は「理事を受諾」した（内政史研究会・日本近代史料研究会編、1974、p.61）

#### (4) 外務省の調査と疑義—「宣撫」「人心収攬」への利用の如何について

前節までにおいては、大島豊の思惑を中心に、外務省文化事業部、そして陸軍との間で交わされた議論を見ながら、外務省の支援の下、総会ではなく後援会として紅卍字会が「設立」されることになった経緯を確認したが、それと同時に外務省は、大島の申し入れを受けたのち、中国の各領事館に対して紅卍字会の実態調査を命じていた。

1938年6月10日、時の外務大臣宇垣一成は、在中国領事館関係者に対して次のような電報を送った。

最近時局ノ推移ニ鑑ミ民間一部ニ於テハ支那側民心ヲ収攬スル目的ヲ以テ世界紅卍字會ノ活動ヲ助長シ利用セントスル議アリ當方トシテハ其ノ外界ニ及ホス反響ヲ慎重考量シ少クトモ表面上純然タル慈善事業トシテ行フコトヲ条件トシテ適宜右運動ヲ助成致度又軍側ニ於テハ其ノ宣撫工作ノ線ニ沿ヒ其ノ所期ノ効果ヲ擧ゲ得ルモノナルコトヲ主眼トシテ出來得ル限り速ニ右運動ヲ具体化スル必要ヲ認め居ル處本會ニ付テハ曩ニ外國系救濟團體ノ資金及統御ノ下ニ活動シ又ハ國民政府ノ壓迫ニ依リ其ノ行動ヲ牽制セラレタル事例モアル一方右具体的計畫ノ樹立ニ當リ現地ニ於テ果シテ如何ナル程度ニ本會ノ活動ヲ助長利用シ得ヘキヤヲ承知シ置要アリ旁々貴地軍側トモ聯絡ノ上本會ニ付左記ニ點御取調ノ上貴見ト共ニ御回電相成度シ<sup>30</sup>

宇垣外相は、「宣撫工作ノ線ニ沿」って、この「運動ヲ具体化スル必要ヲ認め居ル」が、中国紅卍字会への支援は、「表面上純然タル慈善事業トシテ」行いたいと考えている。一方で、現地陸軍は「宣撫工作」として利用したいとしているが、いずれにしても、①日本以外からの支援が無いが、②政府の弾圧が加えられていないかにつき、実態調査を行ってから判断したいとしている。

1938年5月26日に近衛文麿内閣の外務大臣に就任した宇垣は、近衛がすでに出していた「国民政府を相手とせず」声明の修正・撤回を条件に入閣した。宇垣は、泥沼化する日中戦争を終わらせるために、様々なルートを紹介しての和平工作を行っていたが、いわゆる文化工作にも関心を持っており、特に華北における民衆に対する教育・農業政策を強化せねばならないと考えていた（宇垣談、1938、pp.214-220）。その点で、広範な事業を展開する紅卍字会にも注目し、「民心収攬」のためにこれを用いたいと目論み、紅卍字会の調査を依頼したと考えられる。

これに対し、各領事館からは様々な報告があった。いくつか挙げておこう。例えば、1938年6月28日付けの堀内参事官（在北京）の報告書である。

- 一、國民政府ハ本會ヲ壓迫シタル事例アルモ支持スル態度ニ出テタルコトナシ又本會ハ宗教團體タル(脱?)同院(道院の誤りか—引用者)附屬事業機關タル獨自ノ立場ヲ有シ外國系タルト内國系タルトヲ問ハス他ノ救濟團體ト何等ノ關係ヲ有セス
- 二、最近日支間ノ戦闘ニ依ル細民ノ救助、屍體收容等甚タ見ルヘキモノ多シ・・・
- 三、最近傳ヘラルル日本紅卍字會成立ノ後之ヲ通シテ中華總會ニ働掛クルコト最モ穩便ト思料セラル

四、當地軍側ニ於テハ作戰時機ノ關係モアリ本會利用ハ時期尚早トノ見解ヲ有シ居レリ<sup>31</sup>

次に、1938年7月1日の田代総領事（在天津）からの報告書である。

- 一、當地紅卍字會ハ外國系諸救濟團體下トノ關係ナク且目下ノ所同會自體トシテハ直接國民政府ト關係ナキモ會員中ニハ密ニ國民政府ト聯絡スル疑アル者モアル趣ニテ・・・
- 三、御承知ノ通り紅卍字會ハ殆ト有産階級若クハ有識階級ヲ以テ組織セラレ居ル關係上民心収攬ノ一方策トシテ之ト緊密圓滿ナル聯絡ヲ計リ同會ノ活動ヲ援助スルコト極メテ時宜ニ適スト認メラルルモ會員ノ素質ニモ鑑ミ餘ニ立入り過クルコトハ餘程考慮ヲ要スト存セラル特ニ我方官憲カ表面ニ立ツカ如キハ面白カラサルヲ以テ絶対ニ之ヲ避ケ近ク組織サルヘキ日本紅卍字會ヲシテ働キ掛ケシムルコトヲ然ルヘシト存セラル<sup>32</sup>

これら外務省中国領事館からの報告においては、紅卍字会は「純然タル慈善事業」団体であり、政府からの圧迫や外国諸団体からの干渉は無いとしたうえで、①日中戦争下にある現地の紅卍字会を直接的に「宣撫活動」に利用することは好ましくない、②日本（軍）は、紅卍字会日本総会（後援会を指している）を通して「援助」をするという形をとるべきとするものが大多数であるが<sup>33</sup>、その一方で、「宣撫活動」に利用できるとするものもある。

ところでこれらの報告における紅卍字会の情報は、事件以前は大本教が、あるいは大本教を調査していた内務省および外務省が把握していたような内容がほとんどである。そのことは何を意味するか。すなわち、今回の宇垣外相命による調査には、事件後の状況を改めて収集する（特に「邪教」大本教の影響が完全に除去されているか、そしてそこに新たな提携先が介入していないか）という意図があったものと考えられる。

さて、幾度か名前の出た林出賢次郎は、紅卍字会中華総会から絶大なる信頼を受けていた人物であったが、1938年7月27日、彼は特に外務省の中央から、

今般左記發起人ニ於テ世界紅卍字會中華總會後援會ヲ東京ニ組織シ北支竝ニ滿洲國ニ於ケル同總會ノ慈善事業ヲ支援致度キ趣ニテ當文化事業部ニ對シ何等助成方願出ノ次第有之候處本會設立運動ニ關シテハ当初ヨリ當部及陸軍側ニ於テ聯絡シ來リタルト共ニ・・・在外公館長ノ意見ヲ徵シ候次第有之候ノミナラス貴官ニ於テモ前記發起人中ノ大島善隣協會理事竝ニ小田文學士等ニ對シ隨時貴見ヲ開示セラレ居ラルル由ニ聞及ヒ居リ候モ同後援會設立發起人側ニ於テハ其ノ設立ノ暁ニハ北支ニ於ケル其ノ活動ニ付專ラ貴官ノ御指示ニ據リタキ意向ヲ表明致居リ候就テハ同後援會ノ設立及其ノ北支ニ於ケル活動ニ關シ御高見当方事務上ノ念迄ニ御回示相成度<sup>34</sup>

と、後援会設立のことも含めて意見を依頼されている。この文章からは、大島・小田が、林出に対して後援会設立に関する意見を求めていたことが分かるが、それは林出が中国紅卍字会の信頼を受けていた人物だったからであり、特に事件後は、彼以外に頼る人物はいなかったからだろう。そこではおそらく、大島らは当初の正式な支部としての紅卍字会日本総会設立案を林出に伝えていた。

この依頼を受けた林出は、中華総会の幹部と面会もしたうえで報告書を書いた。以下は1938年8月10日に林出が外務省中央に送ったものである。

近時東京ニ於テ道院及紅卍字會ヲ創設シ支那及滿洲ニ於ケル道院紅卍字會ト結ヒ彼等ノ事業ヲ助長シ日滿支三國間ノ精神的結合ニ資セントスル企アリ是實ニ時宜ニ適セルモノト云ハサルヘカラス・・・・中華總會幹部ニ於テモ日本總院總會設立ノ機運熟シツツアルヲ喜ヒ之ニ關係スル研究ヲ爲シ主要都市ニ於ケル慈善事業ノ實況ヲ視察スルト同時ニ彼等幹部ト親シク意見ノ交換ヲ爲シ將來共ニ此ノ道ノ宣揚ニ努力センコトヲ切望シ居ル・・・・特ニ注意ヲ要スルハ彼等ヲシテ我方ノ援助ハ我方ニ於テ總院總會ヲ宣撫工作ノ爲ニ利用セントスルモノナリトノ疑ヒヲ抱カシメサルコトニアリ・・・・然ルニ其ノ趣意書中日本總會設立ノ目的四項目中一、防共協定ノ線ニ沿ツテ世界ノ凡ユル宗教的活動ヲ助長シ復活セシメルト云フワガ思想國策ニ合致シ四、他面ニ於テハ支那一般民衆ニ對スル宣撫工作ノ重要ナルルートトシテ役立タンコトヲ期スル次第テアルトアルヲ見テ彼等道院ノ幹部ハ大ニ驚キ直チニ小官ヲ來訪シ万一日本總院總會設立ニ際シスル趣旨ヲ世間ニ發表セラレナハ北支地方ハ兎モ角中南支地方ノ黨政府勢力下ニ在ル道院紅卍字會ハ彼等ヨリ如何ナル迫害ヲ受クルヤモ圖リ難キ恐レアリ故ニ斷然スル意味ノ發表無カラシメンコトヲ希望スト申出テシ・・・・彼等ハ純然タル信仰慈善ノ團體ニシテ政治ニハ一切關係セサルコトノ前ヲ堅持シ居ルモノナレハ之ヲ政治方面ニ利用スルカ如キ疑ヒヲ抱カシメサルコト肝要ニシテ飽ク迄彼等ヲシテ自由ニ其信仰ニ生カサシメ其信仰ニ基キ慈善事業ヲ爲サシメ我方モ亦其信仰ヲ認識シ其事業ヲニ賛成シ内外邦人ヲシテ廣ク道院紅卍字會ノ内容ヲ知ラシムルニ努メ進テ隨時同信仰團體ノ手ヲ經テ清キ援助ヲ與フルニ於テハ眞ニ精神的結合ノ基礎ヲ築キ滿支一般民衆トノ融和ノ上ニモ裨益スルコト鮮カラサルヘシト思考セラル<sup>35</sup>

林出は、紅卍字會日本總會設立と、それが中華總會と提携することには賛同する一方で、政治的利用一辺倒の姿勢については注意深く反対し、発起人らが、まずは道院の正式な修行を受け「修方」（信者）になる必要があることを強調している。さらに、（外務省申請当初の）紅卍字會日本總會規約の草案を北京總院の幹部に見せたところ、宣撫工作に利用しようとする意志が露骨にあらわれ、それが国民政府から弾圧される原因になるかもしれないことから公表を断られたとも述べている<sup>36</sup>。

すでに見たように、林出が依頼を受けた時点では、外務省と発起人グループの間では、紅卍字會日本總會設立はとりやめ、後援会を組織することで合意し、林出にも伝えられていた。しかし林出は、いまだ紅卍字會日本總會案が継続している前提で中華總會幹部と会談している。いずれにしても中華總會幹部にとってみれば、自らの組織下における正式な支部を創設するにも関わらず、その趣旨に「防共協定」や「宣撫工作」といった日本の国策に沿う文言が出てくるのは、どう考えても承服できないことだった。したがって林出は、必然的に趣旨の改変の必要についても言及している。こういった林出の主張は、政治的利用は不可だが、真に道院の信仰を理解したうえで慈善事業を支援することで「精神的結合」をすることが出来るというものであり、その意見は、後援会発起人における政治的紅卍字會観の矛盾を照射しているといえる。

この報告とほぼ同時期の1938年8月8日、北京・中国大使館の堀内干城も、林出の見解に基づく形で次のような報告書を書いている。

・・・・之ヲ利用シ宣撫工作ノ一助ト爲サントスルカ如キ氣配カ少シニテモ表ニ現ハルルニ於テハ彼等ハ之ヲ喜ハサルノミナラス自然我方ニ接近ヲ避クルニ至ラシムル惧アリ就テハ今回東京ニ於テ紅卍字會中華總會後援會設立ノ企テアル由ナルカスル會ヲ通シテ當地總院總會及濟南母院ニ接近セシメ彼等ノ信仰、修養及慈善事業ヲ探究セシメ彼等ト精神的ノ親交ヲ重ネシメ時ニ應シテ同後援會ヲ通シテ紅卍字會ノ慈善事業ヲ助長セシムル如ク爲サシメハ間接ニハ宣撫工作ノ上ニモ有効ナル結果ヲ來シ得ル・・・・<sup>37</sup>

政治的利用の「気配」を現してはならず、あくまで道院の信仰を重視し、そのうえで慈善事業を後援することを目指すべきであるとする。しかし、「後援會ヲ通シテ慈善事業ヲ助長セシムル」の一文からも分かるように、その主旨は基本的に日本政府であり、後援会がこの時点で外務省文化事業部の文化工作の一環となっていることは明白である。その意味においてはやはり政治的利用であることに変わりはない。

### (5) 外務省文化事業部と助成の決定—活動資金をめぐる

ここまでの経過によって、外務省は中国における紅卍字会の状況を詳細に把握し、文化事業部に、慈善事業を支援する団体として、後援会助成の方針を概ね決定しつつあったように見える。しかしながら、組織・活動の具体的な内容についてはいまだ定まっておらず、本決まりとはなっていなかった。それどころか、この段階に到ってなお、後援会の在り方についての議論が文化事業部と後援会発起人との間でなされていた。

それは特に運営資金をめぐるであった。1938年8月24日の記録を見よう。

大島理事ハ兎角官廳ニ依頼スル傾向アルモ本會ハ何處迄モ民間淨財ノ寄附ニ依ルコトヲ本体トスル建前ナルヲ以テ此點ハ外務省ヨリモ大島理事ニ充分注意アリ度キ旨申添ヘタルニ付同二十四日午後大島理事ヲ招キ當部トシテハ本會創立費トシテ金五千圓也ヲ支出助成スルコトトナリ居ルモ元來本會創立ノ趣旨ハ民間ノ淨財ヲ集ムルニ在ルモノナルヲ以テ右決意ニ充分ナル活動ヲ開始セラレ度キ旨述ヘ置キタル處大島氏ハ最初ヨリ本會創立費トシテ最低一萬圓也ヲ豫定シ居ル次第モアリ旁々少シク増額願度キ旨ヲ述ヘタル<sup>38</sup>

「兎角官廳ニ依頼スル傾向」のある大島豊は、文化事業部が提示した5千円という額に対して、活動開始の資金が必要として増額してほしいと述べているが、文化事業部側は、本活動は「民間の淨財」によるべき性格のものであるにも関わらず、多額の助成をすることは不可能であると回答し、本件を一度は打ち切ることにした。文化事業部としては、費用対効果、また後援会の立場の曖昧さなどの観点から鑑みて、そのような対応をしたと思われるが、一度は決まりかけていた助成の方針に、暗雲が垂れ込めてきたのはこの頃であった。

しかし同年10月になると、後援会結成の新聞報道がなされた。

・・・世界紅卍字會こそは今次聖戰の究極目的たる日、支兩國民の親善提携上最も信頼すべき團體であるとの見地から、今夏來吾國民間の有力者によつて同會後援會結成の議が起り、内々準備が進められてゐるが・・・今や其の方面との諒解がつき次第近く正式發會の段取りとなつた（『中外日報』、1938a）

この記事では、外務省の助成については何等触れられておらず、「其の方面」と書かれているだけであるが、ほぼ同時の10月7日、発起人の小田秀人は正式の申請書を外務省に提出した。文化事業部はその内容を認めず、「本件助成金ノ支出ハ見合ハスコト<sup>39</sup>」を小田に告げた。その原因は史料からは明確には確認できないが、やはり大島の増額希望に端を発する資金の問題が大きかったと考えられる。

それから二か月が経った1938年12月4日には、大蔵公望、遠藤柳作、さらに北京から帰国していた林出賢次郎が後援会について相談をしているが（内政史研究会・日本近代史料研究会編、1974、p.97）、それは助成が不承認となったことを受けて、後援会の趣旨や活動方針などをどうすべきかについてのものだったと推測される。

1938年12月10日、小田は申請書と趣旨・規約を修正したうえで再び提出した。その主旨は次のようなものである。

・・・満洲事変支那事變に際してもよく中正を守り、戦死者の埋葬、傷病者避難民の處理救濟、戦後の治安回復への協力等枚擧に違なき次第に有之候。依て茲に同志相圖り世界紅卍字會後援會を組織致し、その慈善事業を後援し併せて日滿支各民族の精神的融和親善及び惹ては東洋平和の樹立に對して貢獻する所あらんことを期する次第に有之候。<sup>40</sup>

紅卍字會は、満洲事変・日中戦争において「中正」的慈善活動を行った団体であるため、その事業を支援することで、「日滿支各民族の精神的融和親善」「東洋平和」に資する。これは以前から変わらない論理である。その一方で資金面については、

本後援會の主たる經費は事業の性質上民間の淨財喜捨に俟つべき事勿論に御座候得共、會創立の頭初に當ては、事務所の設立・現地との連絡調査滿支紅卍字會代表者の招聘、紹介文書の出版等其他のため所要出費少なからざる見込に有之候に就ては補助金御下附相願ひ度く<sup>41</sup>

として、文化事業部の意向をある程度忖度した内容になっており、一度は断られた助成を何とかして得たいという意向がうかがえる。無論この文面のみならず、この二か月間に何らかの折衝があったのであろうが、外務省はこれを受けて助成を決定した。

同後援會ハ中華民國及滿洲國ニ於ケル有力ナル社會慈善事業團體タル世界紅卍字會ヲ一般ニ紹介シ旁同會ノ滿洲北支ニ於ケル慈善事業ヲ援助スルコトヲ目的トスルモノナルカ右ハ時局柄日滿支各民族相互ノ精神的融和親善ニ寄與スル所尠カラスト認メラレ且、同會ノ經費ハ本來民間ノ淨財喜捨ニ俟ツヘキモノナルモ創立當初ニ於テハ民間寄附金及會費ノミニ依テ之ヲ賄フコト困難ナルハ已ムヲ得サル所ト認メラルルニ付同後援會第一年度（昭和十三年度）豫算金一萬五千圓中不足額金五千圓也ヲ昭和十三年度ニ於テ對支文化事業特別會計事業費ノ項助成ノ目ヨリ支出シ<sup>42</sup>

紅卍字會の紹介・援助が「精神的融和親善」につながるとして後援會の意義が認められ、助成が決定されたが、それはあくまで設立当初に不足すると推測される5千円のみであった。当初大島が申し入れ、中国で調査が行われた際に比べると、外務省の態度はかなり消極的なものとなっているが、その一因には1938年9月に宇垣一成が外相を辞任したこともあるかもしれない。宇垣の様々な和平工作は水泡に帰し、その状況で日中戦争は泥沼化の様相を呈していたが、そんな中で、後援會の設立などは外務省にとっては、以前とは異なりもはやほとんど意義は認められなかったのだろう<sup>43</sup>。したがって、後援會は大島らの当初の構想からは随分とかけ離れた、規模の小さなものならざるを得なかったのである。

### 3. 世界紅卍字会後援会の活動

#### (1) 組織—国策研究会との関わり

1938年12月15日、後援会の正式な発足が『中外日報』において報じられた。

一九一一（一九二一の誤り—引用者）年その創立以來眞に驚異的な慈善活動を滿、支に繰り展げ、さきの上海事變及び今次事變に際して愈よその眞價を中外に發揮しつつある世界紅卍字會の動きこそは新東亞建設に重要な役割を演ずべきものであるとの観点から今夏來吾國民有力識者によつてこれが後援會結成の議が起り、貴族院議員遠藤隆作（柳作の誤り—引用者）氏、松井七夫中將らが中心となり準備を進めて來た（既報）がその後北京からも同會最高幹部の來朝打合せを見、遠藤理事長以下各理事、主事等の陣容も確定するに至つたので年内近日中に同後援會の實質的結成を遂げ、理事會を開いて具體的方策を協議、遅くも明春には早々にその發會式竝に第一回の日本總會を催し得る段取りとなつた、なほこれについて右後援會設立準備委員たる小田秀人氏は左の如く語る。

愈よ會も積極的に近日より具體化しますが、從來兎もすれば吾々の計劃運動が例の大本教再建運動ではないかと各方面の誤解を招き、設立準備に多くの障害を蒙り、迷惑しました。だが吾々の運動は右いふやうなものとは何等の關係もないことを切に諒解を願つて置きます（『中外日報』、1938b）。

この記事を一読するだけでは、その目的はよく分からない。ただ、紅卍字会が「新東亞建設に重要な役割を演ずべきものである」から後援会を設立する、ということしか読み取れない。また「大本教再建運動」と「誤解」されたことに加え、それではないことも強調されているが、その「誤解」は大島豊と小田秀人が元信者であったことを踏まえれば無理もないだろう。いずれにしても全体として何をする団体なのかは極めて曖昧である。ではもう少し具体的にその内容を把握するために、後援会の公式パンフレットの趣旨を見ておこう。

……殊に今次事變に當つて、戰禍収束後各重要都市に於て逸早く治安維持會が組織せられ、わが宣撫班と提携努力して治安の回復維持其の他善後措置が敏速活潑に行なはれつ、あることは一般内外人の刮目する處であるが、その中心人物の大半が常に世界紅卍字會員であることも屢々報ぜられる、所である。……

茲に吾等は普く同志を糾合して世界紅卍字會後援會を組織し、一面に於ては同會對する我が國民一致の認識支持の態度を明かにし、他面に於ては各々應分の淨財を醸出し、その組織を通じて滿洲及び中華同胞難民救濟の一助たらしめんとするものである。

冀くはわが朝野の人々が、日滿支三國の精神的結合の必要性、及び戰後經營の重大性に察して、吾等の企圖に擧つて御賛同御助力を賜はらんことを（世界紅卍字會後援會編、1939、pp.1-2）。

「今次事變」すなわち日中戦争における紅卍字会の活躍を、日本国民に「認識支持」させ、その活動を支援するための寄付金を募るとするのが目的であり、この点は外務省文化事業部と後援会発起人の間で交わされた議論に従っている。

なお、一つ前に引用した記事には何人か役員の名が出ているが、正式に決定したのは次のような陣容であった（世界紅卍字會後援會編、1939、pp.10-11）。

会長	(空席)
理事長	遠藤柳作 (貴族院議員、前満洲国国務院総務庁長)
常務理事	松井七夫 (陸軍中将、予備役、国策研究会関係会員)
理事	大蔵公望 (貴族院議員、国策研究会常任理事・委員) 高木陸郎 (中日実業総裁、国策研究会委員) 林久治郎 (外交官、国策研究会委員) 八田嘉明 (貴族院議員、鉄道官僚) 坂西利八郎 (貴族院議員、陸軍中将) 藤沼庄平 (貴族院議員、国策研究会委員) 大島豊 (善隣協会理事)
会計監督	原安三郎 (実業家)
主事	小田秀人 (心霊研究者)

繰り返し述べてきたように、実質的中心は大島と小田であるが、国策研究会の関係者（上記では後援会発足以前・以降の就任も含めて表記）が約半数を占めている。なぜそうなったかといえ、その人選が当初「大島理事二一任<sup>44</sup>」されていたからであろう。国策研究会でモンゴル事情についても報告していた大島は、当然大蔵ら該研究会委員と知り合っており、おそらくはその繋がりから後援会入りを依頼したと考えられる（なおこの顔ぶれは文化事業部との協議・承認を経ている）。しかしながら、今後の活動の中で若干名前が出てくるのは大島・小田のほかは、遠藤・大蔵・松井・坂西だけに限られ、他の人物のほとんどは紅卍字会に対する宗教・信仰的理由によって参加したのとは考えにくく名義貸しの感が強い。また呉清源は役員としては入っていないが、「参事」として協力している（呉，1997，p.101）。以上から、後援会は国策研究会を（名義的には）骨格とすることで体面を保ち、その国策的意義を打ち出そうとしたといえるであろう。

## (2) 論理と実態—具体化しない「実践」

外務省に提出された後援会の活動計画書にはいくつかその内容が示されている。それは、①事務所設置<sup>45</sup>、②視察員および連絡員の派遣、③中華、満洲両総会の代表者招聘、④紅卍字会を紹介する文章・冊子等の発行、⑤講演会、座談会の開催、⑥会員の獲得、⑦中国、満洲国における難民救済、⑧「日満支民族」の交歓行事開催であった<sup>46</sup>。しかしこの後見ていくように、これらは具体性に乏しく、実現したとしても継続的には行われず、その効果もどの程度のものなのか不確かなものばかりであった。

最も活発に行われたのは、④紅卍字会を紹介する文章・冊子等の発行であった。後援会公式および後援会の肩書で発行されたものに限定すると、世界紅卍字會後援會編（1939）、小田（1938・1939a・1939b・1940・1942）が挙げられるが、いずれも紅卍字会の歴史、信仰、慈善事業、日本に対する支援を紹介したうえで、「大東亜建設」と「聖戦完遂」のための「治安維持」と「思想統合」に紅卍字会が役立つことを強調している。その論拠として扶乱に与えられた「役割」は大きかった。例えば小田は、

(扶乱に一引用者)「中・和の和平が世界平和のもとである」と示されたので紅卍字會々員は決して日本の軍

事行動を悪いとはいはず支那國民に何千年來の業があつて天から制裁を受けるのだとしてゐる、防共問題でも赤化思想は不可ぬとなし、思想的には歐米思想に遠く極めて東洋的で・・・(小田, 1938)

として、「吾々も彼らの思想を利用するなどの功利的考へは極力排して眞の日、滿、支の精神的提携のために彼らと心から提携すべきである」(小田, 1938)と断ずる。何をかいわんや、といった内容であるが、ここに見られるのは、①後援会は純粋に紅卍字会の慈善事業を後援する団体であつて政治的動機は皆無、②紅卍字会の慈善活動の動機は扶乩であり、それが「日滿支提携」を示しているため彼らとは「精神的提携」をするべきである、ということである。すなわち、後援会においては、「日滿支の精神的提携」が信仰の意味になっており、政治的動機をそこに隠ぺいすることで、後援会は純粋な慈善事業支援組織である、という論理を作った。その際、道院の信仰や扶乩は、完全に形骸化させられ、日本側の勝手な解釈によってその根拠として示されることになる。

さらに小田は、「陛下は祭政一致の皇道を御實踐になり、臣下は祭政一致の皇民道を實踐する」(小田, 1939a, p.1)ものとしての「惟神の大道」と、紅卍字会を関連させて次のようにも述べている。

・・・道院紅卍字會の生活法は、實にわが惟神の大道に最も接近した生活法である様に思はれる。即ち彼等は一面に於て唯物論的生活法を否定すると共に、他面一宗一派に偏することなく、凡ゆる宗教の眞生命を把握し且つ同時に之を實生活に表現しやうと努力しつゝある。即ち彼等の所謂内修外慈又は内修外功といふ独自の生活法は實にわが惟神の大道に於ける全体主義的祭政一致の生活法の個人的基礎を形造るもの、ように思はれる。何れにしてもこの内修外慈の信仰的生活法が全滿全支に行き亘つた場合には、それは東亞の皇道の長期建設に對して貢獻する所少からざるものがあると思ふ(小田, 1939a, p.2)。

「惟神の大道」と紅卍字会は、その「信仰的生活法」において「接近」としたこの文章にはそれを示す具体性や根拠がないため、かなり牽強附会の感があるが、小田が言いたいのは、「惟神の道」=「祭政一致」の「信奉實踐者」たる日本人が、「紅卍字會を理解し合流し之と合作し之を指導する」(小田, 1942, p.107)ことで、「東亞の皇道の長期建設(小田, 1939a, p.2)」の「歴史的發點」(小田, 1942, p.107)を期すという、当時の国策に沿つた極めて無思想的な主張であつた。

無論これらすべてが小田の手になる文章ではないと考えられるが、いずれにしてもこういった紅卍字会理解を見ても、ある人物の紅卍字会に関する記述を想起せざるを得ない。それはすでに触れた内田良平『滿蒙の独立と世界紅卍字會の活動』である。内田は、「道院の提唱するところに聞く」などと最もらしい前置きをしたうえで、「道院の道は惟神の大道の意味であつて決して道教からとつてきたものではない。元來、道は先天的で教えは後天的なものであ<sup>47</sup>」り(内田, 1931, p.85)、ゆえに紅卍字会は「教えでもなく先天即ち惟神の大道を宣布して世界を改造せんとする純眞なる信仰團體」(内田, 1931, p.85)であるとする。「惟神の大道」を實踐する団体としての紅卍字会を、小田と同じく高く評価しているのである。さらに滿洲事変に際しては、

最近の神示に『支那の平和は日本天皇陛下の御稜威を借るに非ざれば招來するに能はず』故に今回の奉天に勃發せる事變にも驚愕の色なく寧ろ當然とし、支那軍人の皇軍に無抵抗をとりし者多かりしは此の神示に服従せるが故である(『北國夕刊新聞』, 1931)

と述べて、滿洲事変が扶乩によって予言されていたとし、さらにその神示と「御稜威」の一致を主張することで、

紅卍字会が「惟神の大道」に合致しているかを強調している。こういった内田の紅卍字会に対する記述について、主に中国近代宗教を研究する歴史学者の杜博思（Thomas David Dubois）は次のように述べている。

どれが彼の道院に対する理解であり、どれが彼の主観による勝手な想像であるかを区別することができない。内田本人が大本教の熱狂的な信徒であり、かつ大本教と道院の教義が「完全一致」であるとまったく信じきっていることを鑑みれば、彼は両者を区分していなかったと推測できる。……内田の指していたところは日本道院一言い換えれば大本教、であったといえる（杜博思，2012，p.247，筆者訳）。

すなわち内田の記述は、自らの希望に合致するような勝手な紅卍字会像と、彼が影響を受け準信者となっていた大本教を通して見た紅卍字会＝自らが責任会長を務める紅卍字会日本総会の理想を描いているに過ぎなかったのである。これは後援会にも通底する見方であり、実際、小田秀人の述べている内容とほとんど差異はない。すなわち後援会の紅卍字会像は大本教・内田のそれが下敷きになっており、その意味でも大本教を引きずっていると言える。

さて、ではこういった論理のもとに発会した後援会の活動は、いったいどのようなものだったのであろうか。それを報じている『中外日報』の記事を中心として見ておこう。

まず、1938年12月25日、先のメンバーを集めて東京神田の学士会館において初の理事会が開かれ、今後の方針が協議された（『中外日報』，1938c）。その主眼は後援会メンバーの訪中であった。翌1939年1月、小田秀人、松井七夫が北京、済南等の紅卍字会を訪問し、実地調査、連絡、入信の儀を行ったが、彼らはここで「後援会の實動等に関して大いに認識を新にし、或ひは多分に見直す處」（『中外日報』，1939a）を発見したという。その結論が日本における道院の開設であった。

何は兎もあれ紅卍字會に對する吾が國朝野の認識を層一層濃化するため、例の最近著るしく國民の耳目を集注せしめた回教にも東京に禮拜堂がある如く紅卍字會の宗教的修行、信仰の道場たる「道院」を全東亞の首都たる東京に開設することが先決問題である（『中外日報』，1939a）

後援会では宗教的要素は取り除くというのが既定方針だったが、おそらくは現地視察によって信仰と慈善が不離一体のものであることを認識させられたのであろう、後援会は東京に道院を設けることを決定した。また中華總會との提携や宣撫活動の支援ではなく、日本国内の活動に舵を切ったのは、

何分現地ハ尚作戦進行中ニテ占領地域非占領地域全般ニ涉リ廣汎ナル組織ヲ有スル同會ヲ一律ニ統制指導スルコトハ困難ナル事情ニアリ、従ツテ本後援會ノ現地積極的活動ハ尚ホ時期尚早ナリトノ結論ヲ得タリ<sup>48</sup>。

という事情があったからであり、ここにおいてすでに本来の目的を達することは困難になっていた。結局、この日本道院建設計画は実現せず、一応「道慈研究所」という準備段階の仮施設を設ける計画に変更された。また中国紅卍字会（中華總會など）への寄付としては、10月の「天津水災救済資金募集」（後援：東京府・東京市・東京商工会議所）を中心に、1000円前後の金額をおくったが<sup>49</sup>、この年の後援会は、8月になっても「まだ正式に發會してゐない」（『中外日報』，1939b）ような状況であり、それ以外に目立った活動はなかった。

しかし翌1940年になると若干活発化したようである。そのきっかけは満洲国皇帝溥儀の訪日であった。6月29日、後援会の小田秀人、松井七夫は、満洲国皇帝の訪日に随伴していた宮内府大臣熙洽侍、従武官長張海鵬（大本

教・王仁三郎らとも以前から深い関係を持つ）らと帝国ホテルにて懇談した。張は、

日本に於ける紅卍字會の設立について遠藤閣下その他数名の人と新京に於て懇談したことがあるが、その後この道院信仰や紅卍字會の事業を通じて兩國が提携し精神的融和を圖つて興亞建設に寄與しようといふ運動が具體的になつたことを非常に喜びとするものである（『中外日報』、1940a）

と述べている。翌4日には張らの講演会（後援会主催、中外日報後援）が京都の同志社大学新島会館で開かれた。①張海鵬「余の信仰を語る」、②金晋庸「皇道と紅卍字會」の二講演が行われ、仏教、キリスト教、新宗教各宗教団体幹部が出席し、盛況であった（『中外日報』、1940b）。この内容について『中外日報』には3面にわたる特集記事が生まれ、「興亞」における紅卍字會の重要性が説かれている（『中外日報』、1940e）。

その後、7月17日第一回在阪華僑懇談会、7月25日興亞院文化部との協議、7月27日研究懇談会、8月3日第二回在阪華僑懇談会、9月大阪事務所開設と相次いで行事を開催したが（『中外日報』、1940d・1940f・1940g・1940h・1940i・1940j）、いずれも具体性と継続性には乏しく、小規模な意見交換会程度のものであった。中国・満蒙に注目すると、9月には松井七夫が再び中国各地の紅卍字會を訪問し、天津水災の寄付金を渡している（『中外日報』、1940k）。またその翌10月には「日支經濟合作に斡旋して蒙疆地方に某製造會社を創立（日本文化中央連盟、1943、p.611）」したというが、後援会にそのような財力があつたはずもなく、おそらく大島あたりから実績作りのために発案された名目的なものであつたと思われる。

翌1941年になると後援会は大日本興亞同盟へ参画した（『朝日新聞』、1941）。国内の「興亞運動」を統合する目的で大政翼賛会の外郭団体として作られた大日本興亞同盟は、約60の国粹主義団体が参加したが、後援会メンバーも、大島（理事）、遠藤（常任顧問）、大蔵（常任顧問）、松井（常務理事）らがその役職に就いた<sup>50</sup>。しかし報道を見ると、1941年に入っても後援会はいよいよ正式に発足、という文言が何度も出ており、活動は本格化していなかったことが分かる。また1940年の外務省への活動報告書でもほとんど有効な活動が出来ていないことが報告されており、活動は完全に払底状態にあつた。吳清源はこの頃のことを次のように述べている。

日本は、紅卍の発祥地である済南の道院を軍隊の駐屯地として使用したりする一方で、紅卍後援会の名をかたって大陸で悪事をはたらく者さえ出てきた。また、大陸からの郵便物はすべて検閲されるようになり、壇訓（神様の教え）を頂くことも、たいへん不自由になっていた。このような状況の中では、紅卍後援会もたいした活動もできない（吳、1997、p.102）。

実際には上に見てきたように1940年および1941年も一応活動を続けていたが、しかしその中心は、後援会のもう一つの顔、心霊実験になりつつあつた。

### (3) もう一つの顔—心霊実験

後援会のもう一つの顔とは、心霊実験であつた。主事を務めていた小田秀人はもともと心霊に関心があり、扶乩を含めて頻繁にその「実験」を行っていたが、後援会活動が認可されて以降も、西高井戸の紅卍字會後援会事務所において、たびたびメンバーを集めてそれを行っていた。理事を務めていた大蔵公望の日記には何度かその記述が

出てくる。

八時、遠藤柳作氏を中心とする紅卍字後援会主催にて、小田氏主催にて内山夫人外一氏を霊媒とする神霊呼出し会に出席、集まるもの十数名。余の書きたる「戦争は何時すみですか」に対し明答あり驚嘆す。世の中にこんな事があり得るかと思ひ不思議なり（内政史研究会・近代日本史料研究会，1973，p.137）。

小田秀人氏、霊界実験の打合せ、日の都合悪く断はる（内政史研究会・近代日本史料研究会，1973，p.158）。

一時三〇分、紅卍字会に行き初めて扶乩を見る。何だかわざとらしく神意と思はれず（内政史研究会・近代日本史料研究会，1973，p.179）。

夜八時より左の人々を招き小田氏の神霊実験を見る。

松井大将、松井中将、佐藤安、種田、下村、緒方。今日は稍不出来なりしがとに角前回と殆んど同様にて不思議の事なりし（内政史研究会・近代日本史料研究会，1973，p.280）。

実験には後援会のメンバーだけでなく、小田の知り合いの霊媒師なども参加していたが、他にも陸軍大将真崎甚三郎や作家の芹沢光治良にも声をかけていたようで、真崎の1940年10月25日の日記には詳しくその内容が書かれている。どのようなことを行っていたのかを知るためにやや長くなるが全文引用しておこう。

十七時赤阪丹後町一紅卍字会ニ至リ、小田、白井、勝、芹沢氏等ト会シ、霊媒者大阪ヨリ来レル荻原某氏ヘノ紹介ヲ受ケタ食ヲ共ニシ、其ヨリ出デ、西高井戸一ノ一ニ九小田皓通宅ニ至ル。廿時ニハ高島大佐モ来会ス。八時半頃ヨリ霊媒ノ実演ニカヽル。八時半頃ヨリ霊媒ノ実演ニカヽル。室ハ黒布ヲ以テ暗黒ニシ、別ニ黒布ニテ一區画ヲ設ケ業者ノ座所トス。一側床ノ間ニハ神棚ヲ設ケアリ。業者ハ椅子ニ縛シテ手足ノ自由ナラザル如クシ、祝詞ヲ上ゲ蓄音機ニテ楽ヲ奏シ空ノ振動ヲ起サシム。十四、五分ニシテ室内ニ置ケル小机及机上ノ玩具空中ニ舞ヒ上がり、大風ノ時ノ如キ雨戸ノ振動凄ク起リ、メガホン飛ビ出シ微力ナル声ニテ話シカク。或ル時ニハ妨害ノ靈多キ故祝詞ヲ上ゲ呉レナド云フ。言ハ業者ガメガホンヲ通シテ云フコトナレバ、之ハ某程度迄ハ解シ得ベキモ、器物ノ空中ニ浮クハ解スルヲ得ズ。又余ガ名刺ニ「日支事変ハ成ルベク速ニ解決セラレタキモノデスガ其ノ見込アリマスカ」ヲ書キアリシモノヲ読ミ終リ、答テ曰ク、我等モ之ヲ念願シアレド之ヲ妨グルヤカラアリ遺憾ニ存ズト（伊藤ほか編，1983，pp.476-477）。

これらの心霊実験は、前述の菊花会でも行っていたようなものであるが、興味深いのは、大蔵や真崎が戦争がいつ終わるかについて「神」に質問をしている点である。彼らはおそらく小田に言われるままに興味本位で託宣をしたと思われるが、まったく相手にしていないというわけでもない。ここで大正期の大本教に主に「鎮魂帰神法」への関心によって入信した軍人らが想起されるであろう。彼らは、日露戦争後から第一次世界大戦期における不安な世相と、先行きの見えない日本国家の状況の中で、「大本教に来て鎮魂帰神法によって「神の实在を経験」し、国家の「魂」＝「皇道」を見ようとした（玉置，2022c，p.137）」。それは「伝統的国家主義思想を若年より鼓吹されているはず」の軍人が、種々の不安からその思想を逸脱・超越しようとしたことを意味する（玉置2022c，p.137）。それとは時代背景や関心が異なるとはいえ、昭和戦前期にあってもなお、引き続く戦争への不安が彼らをわざわざ

こういった実験に参加せしめたのである。すでに見たように、建前上は「惟神の大道」と紅卍字会の神示が一致することが謳われており、彼らにとってはこれを紅卍字会の活動としてとらえても問題なかったのであろう（彼らの日記には実験＝紅卍字会としてその単語が出てくる）。このように心霊は後援会に不可欠の存在であった。

しかし、この心霊実験については後援会内部で対立があったようで、作家の芹沢光治良はそれに参加した際に次のように記している。

紅卍字会に入る。心霊現象について非難した。言わないでもいいくらい非難した。心電というのは見るのではなく感ずるのだと説いてみた。特に神と関連して心霊を現象化しようとする愚を説いてみた。議論になった。呉清源君が僕に賛成した。松井〔七夫〕中將もそうだ（芹沢，2015，p.3）。

ここでは、松井七夫、呉清源が芹沢に同調し、心霊実験に傾きすぎる小田と対立している様子が分かる。呉は「『世界紅卍字会』の活動に関して、神霊現象のみに興味を注ぐのは誤りも甚だしい」（呉，1960，p.129）と言っているが、彼にとっては信仰と精神的修養が重要であって、心霊実験を繰り返す小田には懐疑的だったのだろう。

無論、外務省文化事業部（1939年より新設された興亜院文化部所管となる）の助成を受けている以上、こういった心霊実験を後援会の活動として表立って行うわけにはいかなかったし、公式のパンフレット類や報道には、そういったものは出てこない。それでも実験は後援会発足当初から断続的に行われている。なぜならば小田にとって、心霊実験とユートピア思想は直接繋がっており、それを無視した後援会活動などあり得なかったからである。

とはいえ、このような状況では後援会の活動が進展する筈も無かった。呉清源によれば、

昭和15年になると、紅卍後援会は実質的な活動もできなくなり、有名無実の存在となってしまった。このような状態で存続しても意味が無いので、私は解散を提案し、理事会に計って（ママ、「諮って」の誤りー引用者）、遂に解散することにした（呉，1997，p.102）。

呉はついに解散となったとしているが、一応この後も後援会自体は存続していた。しかしこの心霊実験がきっかけとなって、後援会に大きな変化が訪れる。それは篁道大教との合流であった。

#### 4. 変容と終焉ー篁道大教・璽宇への合流

呉清源は篁道大教との合流について次のように述べている。

解散が決まると、紅卍の種を絶やさないために、御本尊の「至聖先天老祖」を祭っておく場所を探さなければならない。また、専任であった小田さんが失業してしまうため、その身の振り方も決めなければならない。結局、当時の赤坂丹後町にあった紅卍後援会事務所のすぐ近所にある篁道大教という神道の宗教団体の処に祭ることになった（呉，1997，p.102）。

對馬路人によれば、篁道大教とは、「戸寿工業」で鉱山開発業などを行っていた事業家で菊花会にも参加していた峰村恭平と、その義弟峰村三夫が興した「神道系の宗教サークル」であり、天皇への帰一と「教業一致」を唱えて

いた（對馬，1991，p.339）。巫者であった峰村三夫が受けた「神示」に基づいて鉱山開発事業や布教活動を行っていたようで、「御神示が紙の上に文字で現れるなど、紅卍と宗教形態が似て」いた（呉，1997，p.102）。

扶乩もさることながら、この篤道大教の場所すなわち四谷区愛住町の峰村宅と、赤坂にあった後援会事務所が互いに近かったことは、その合流を促す要因となった。両者の交流が頻繁に行われるようになったのである。「老組」を篤道大教に祭ったのち、まずは峰村と菊花会以来交流があった小田が璽宇に「就職」し、その神示に基づき鉱山開発事業に従事し始めた（對馬，1991，p.341）。一方妻が峰村の遠縁であった呉清源は、もはや帰国が困難な中国における紅卍字会に代わる「心の拠りどころ」として同教に出入りするようになった（呉，1997，p.114）。大島豊も合流したとされるが、彼は善隣協会・大日本興亜同盟の理事としての仕事があったため、ほかの二人ほどではなかったと思われる。

こうして後援会は実質的に篤道大教へ吸収される形で合流し、同教は璽宇と名前を変えた。その時期は1941年11月前後だったと思われる。

遠藤柳作氏を理事長とする世界紅卍字會後援會は最近興亜同盟にも参加して着々運動を進めつつあったが今回事務所を東京赤坂丹後町より四谷愛住町七十六に移轉したが新事務所はかねて計畫中の道慈研究院の豫地であり、相當廣大な建物で、將來運動の積極化が豫想せられてゐる（『中外日報』，1941b）。

「四谷愛住町七十六」（現新宿区愛住町）は、かつて事件以前、昭和神聖会総本部をはじめ、昭和青年会東京本部、人類愛善会東洋（亜細亜）本部、昭和坤生會から紅卍字会日本総会に至るまで、大本教の主要諸団体が置かれていた場所である（労働經濟調査所編，1935，p.91、皇道大本本部編，1933，p.158，p.199、昭和青年会本部編，1934，p.1，p.53）。同地に後援会が移轉したのは<sup>51</sup>、事件後何らか大本教に関係するような経緯があったと考えるのが自然だろう。また璽宇の峰村宅も四谷区愛住町なので、事件後同地内に居住していた可能性もある。いずれにしても大本教因縁の地である同地に後援会が移轉したことは、事件が残したものとしての後援会を物語っている。「道慈研究院」は先に述べた日本道院建設計画が変更になったものであり、翌1942年2月12日の理事会で決定されていたと思われるが（善隣協会編，1942，p.134）、結局仮開設が行われただけで実現しなかった。

それでも璽宇では中国の紅卍字会との連携を重視し、1942年3月、峰村恭平の意志で小田秀人と呉清源の二人は中国へ渡った。その目的は、表向きには、後援会による「道慈研究院」の正式開設と、宗教協力による「興亜活動」を具現化するために、満洲国と中国の紅卍字会代表団＝佈道団を日本に招こうというものであった。報道でも後援会の名は存続しており、璽宇の名は出てこない。しかし、実際は「璽宇」もかつての大本教のように、紅卍と宗教上の交流を深めよう」（呉，1997，p.108）という神示に基づく、璽宇による活動であった。この頃は後援会がまだ正式に存続はしており、璽宇の中に後援会が存在するという微妙な状態だったのである。

小田と呉はまず、後援会を管轄する興亜院の華北連絡部調査官であった志智嘉九郎を訪ねた。その後、三人で道院の北京総院へ行き、北京政府の軍人であり紅卍字会会長を務めていた許蘭洲に面会して、日本への佈道団派遣を要請した（呉，1997，pp.108-109）。その後、満洲国・朝鮮半島を経て山東省にある済南母院に到り、佈道団派遣の如何について壇訓を賜わったが、「時勢が困難であるため……適切でない」（呉，1997，p.109）との内容であった。二人は1942年5月初旬ごろに帰国したが、その後の『中外日報』を見ると、同年10月ごろまで、日本道院の建設と満洲国・中国の代表団訪日に向けて準備しているとの内容が繰り返し報道されており、なかなか実現しない状態は依然として変わらなかった。

この頃はすでに、遠藤柳作や大蔵公望など、政界の後援会理事たちはほとんど関わらなくなっていたと思われる。

大蔵の日記を見ると 1942 年 5 月 13 日に、

世界紅卍字会後援会の久し振の理事会を延寿春に開く。松井、呉、小田、他の人々出席。東京の華僑に話しかけ、それが中心となり、紅卍字道場を設けさせるようにすることに決す（内政史研究会・近代日本史料研究会編、1975、p.32）。

とある。久し振りの会合は、おそらく呉と小田の訪中の報告を聞くのが主眼だったと思われるが、これまでの通り「道場」すなわち「道慈研究院」を設ける方針を確認しただけであった。この後、大蔵日記には一切後援会の話は出でず、遠藤に至っては管見の限りまったく記録がない。

その後も関西の旧大本教信者らとの研究会や座談会などは不定期に開かれていたが、翌 1943 年になると後援会の名は一切出てこなくなり、おそらく 1942 年内に後援会としての活動は、興亜院文化部の名目上においても打ち切られたと思われる<sup>52</sup>。ここにおいて、小田・呉は完全に璽宇に入り、遠藤・大蔵他の理事メンバーは興亜同盟の役員となって後援会から離れ、他方の大島は両者の間の立場となった。いずれにしても、それは後援会が完全に消滅し、璽宇に合流したことを表しているのである。

## 5. 終わりに—第二次大本事件が残したものとしての世界紅卍字会後援会

### (1) 日本と紅卍字会—大本教・連合運動・大陸政策

ここまで見てきた後援会設立の経緯で最も重要なことは、紅卍字会が当時の日本にとってどのような存在であったか、という点であろう。

言うまでもなく紅卍字会は中国に生まれた宗教・慈善団体である。それが大本教と提携して連合運動を展開することで、日本の国策を積極的に支援することとなったわけだが、それは紅卍字会が中国全土、満洲国において極めて大きな社会的・政治的影響力を有していたためであり、したがって日本の大陸政策とはすでに切っても切れない関係にあった。

その過程で事件が起こる。大本教が壊滅すると、日本政府は紅卍字会との大きなチャンネルを失った。さらにそのような状況下で日中戦争が勃発し、紅卍字会の現地陸軍を中心にその利用が注目されるようになる。現地では、陸軍が中心となって大陸宗教工作を展開していたが、紅卍字会は準公的な慈善組織としての性格が強く、日本軍にも「中立」の立場から協力していたため、宗教団体としてその工作に組み込むことは難しかった。また紅卍字会の信仰体であった道院は、国民政府の反迷信方針のもと一度は活動停止を余儀なくされ、この当時は宗教的活動を縮小しており、純粋な宗教団体とは言いにくい状況にあったのである。

### (2) それぞれの思惑と絡み合い—事件後の信仰

こういった状況で画策された後援会の設立経緯を見ると、構想当初は日中戦争下にある中国大陸における、日本の宣撫活動への利用がその目的であった。外務省文化事業部の対中文化工作の一環として紅卍字会日本総会を設立し、それを日本政府と中国紅卍字会の間立たせることで、後者を統括しようとしたのである。

外務省はこれに対し、まず宇垣大臣が紅卍字会の現地調査を命じた。宇垣は紅卍字会の利用を日中戦争の終戦工作の中で捉えていたと考えられるが、結局そういった政治的動機は表面には出さず、また事件に鑑みて宗教的要素も全く取り払ったうえで、慈善事業を後援するという形が望ましいとした。しかしながら、表面的には政治的動機を隠すとは言いながらも、大島豊がその運営において外務省や陸軍省を頼り、大蔵公望や遠藤柳作とかかわっていることから、国家的に紅卍字会を利用する意志が強くあらわれており、それは紅卍字会の「国策化」を図ったものであったと言えよう。

大島は、大本教を脱退した紅卍字会信者として、さらに善隣協会理事長として、正式な支部としての紅卍字会日本總會設立を画策した。その意志は、紅卍字会を日本の手によって支配することで、大陸政策に資する宗教工作を行うことであった。しかし同じく発起人の小田秀人は大島とはベクトルの異なる関心を持っていた。小田は典型的な煩悶青年として心霊に関心を持ち、大本教に入信しその影響下で菊花会を主宰していた人物で、紅卍字会には扶乩によって惹きつけられた。小田における心霊とは、自らの人生に対する煩悶と、大本教や浅野和三郎ら心霊主義者の宇宙・世界観が接続されたものであり、心霊の存在を明らかにすることで世界をユートピアへと改造するという超国家主義的なものであったから、扶乩はそれに応えるものとして捉えられた。したがって小田にとって宣撫活動への利用は、あくまで建前的なものであった。

彼ら二人に共通するのは、大本教の「東亜経綸」的思想である。大本教は、紅卍字会との連合運動の中で、「宗教統一」「アジア主義」を軸として、独自の宗教的言説を説きながら勢力を拡大していた。そこには黒龍会をはじめ様々な目的を持った者が参加しているが、大きな方向性としては、満洲国を中心として、「東亜」を宗教的・精神的に統一し、やがて「世界統一」へと至らしめるという、八紘一宇の言説にも重なるものである。内田良平はその中で最もその宣伝をした人物であり、特に扶乩によって「一糸乱れぬ」行動をする紅卍字会を支配することで「滿蒙独立国」建国を主張した。大島や小田はその部分をかなり意識的に継承しており、その意味で、大本教というメディアを通して見た紅卍字会像が彼らには影響していると言える。

他方で大本教と紅卍字会をつないだ林出賢次郎は、発足前の段階で、信仰を深く理解し「修方」となったうえでなければ、日本總會設立は不可能であると述べていたが、道院の宗教信仰について最も忠実だったのが呉清源であった。彼は、日中両国を祖国として生きた棋士であり、後援会設立前に自らの悩みがもとで道院に入信していた。日中戦争に際しては、両国に引き裂かれて苦悶していたが、その時の拠りどころは「世界平和」を唱える紅卍字会の信仰であった。その後、小田・大島から後援会に参加を求められた際にも、純粋な信仰として紅卍字会をとらえており、後援会はそれを拡大するための活動ととらえていた。それは小田・大島とは大きく異なっていた。

しかし後援会に、紅卍字会の信仰について忠実であろうとした形跡はほとんどない。むしろ扶乩を創作して、それが日本の国策に協力すべきとしている、としたように、その教義の換骨奪胎を狙っていたのである。それを隠ぺいする言葉が「日・満・支」「大東亜共栄圏」の「精神的融合・提携」であった。ここに、後援会における奇異な宗教観がみられる。純粋に慈善事業を支援する、政治的動機は無いと趣旨では述べながらも、その背景には「精神的提携」という意味の信仰を持ち出していたのである。こういった無思想化状況は、当時の日本における思想弾圧の状況をはっきりと表しているが、そこになだれ込む形で行われたのが紅卍字会の「日本化」であった。したがって後援会は、その道院信仰を表面的かつ恣意的に流用した、中国の紅卍字会とはほとんど関係のない、擬装の紅卍字会であったと言えよう。

### (3) 世界紅卍字会後援会という存在

後援会の活動は最後まで進展しなかった。目立ったものと言えば、小田・松井の中国・満洲国への訪問と満洲国の張海鵬の講演会開催程度であろう。その原因は様々あるが、当初から目的とその実現のための具体的方策が全く無いままに活動を開始したからである。たしかに宣撫への利用はその一つだったが、なぜそれを日本でやる必要があったかの根拠は薄い。また旧大本教信者が中心になったことも、後援会に警戒感を持たせ、その活動に制約を生み出す要因となっただろう。『中外日報』は数多くその活動を報道しているが、実質的には何らの成果もなかったことは自明である。とはいえ、本論文では資料的制約から論じることが出来なかったが、この活動に対する一般社会の反応およびそれに対する影響は明らかにしていく必要がある。その点は今後の課題としたい。

さて、その一方で、小田秀人を中心とした心霊実験は熱を帯びていった。菊花会解散後も断続的に行っていた心霊実験が後援会に引き継がれたのである。後援会のメンバー以外も参加し、様々な実験を行っていた。以上を踏まえると、後援会は①顕教：中国紅卍字会の慈善事業支援・宣伝、道院教義と皇道の「融合」、②密教：紅卍字会の宣撫工作への利用、③秘教：心霊実験で構成されていたといえる。

後援会の実質的活動は、戦争の激化によって1942年に打ち止めとなったが、すでに1941年には篁道大教に合流していた。同教は合流によって璽宇と名を変え、中国紅卍字会との提携を求めていたが、それは表面上後援会の名によって行われた。すなわち、後援会は最終的に璽宇となったのである。言い換えるなら、紅卍字会の「日本化」とは、①大本教という新宗教との出会い→②連合運動・国策支援→③事件・崩壊→④旧大本教信者・外務省・国策研究会を中心とした国策化→⑤ふたたび国策の枠から離脱し、璽宇という新宗教へと化していくという、昭和戦前・戦中期の宗教と政治のあわいにおける運動であった。

事件が残したものは、戦争によって大きく形を変えて蘇生し、そしてまた戦争によって変容・終焉したのである。

<sup>1</sup> 筆者は、「連合運動」の時期区分をつぎのように定義している。①初期（1923-1925）：両団体提携～世界宗教連合会結成（玉置，2021a・2021b）、②中期（1925-1930）：世界宗教連合会結成～東瀛佈道団派遣完了（玉置，2022a・2022b）、③後期（1931-1935）：満洲事変勃発（慈善活動・満洲国建国運動）～第二次大本事件。

<sup>2</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015858600（32画像目、以下、数字のみ示す）「世界紅卍字會ニ關スル件」（1938年6月9日）、助成関係雑件第5巻「紅卍字会助成 自昭和十三年六月分割1」（外務省外交史料館）。なお以下は初出でない限り、レファレンス・画像番号および史料名・作成年月日のみ示す。

<sup>3</sup> 同地には後年、他の大本教諸団体の本部なども置かれた（後述）。

<sup>4</sup> Ref.B05015858600（2）「紅卍字會運動ニ關スル件」（1938年6月8日）。

<sup>5</sup> なお、戦後は、「大日本興亜同盟」理事を務めていたことを理由に公職追放されたが、その後復職して東洋大学理事長・学長、日本紅卍字会会長などを歴任した。同会においては、様々な金銭的トラブルや、香港にあった「救

世新教」との連携を強めて種々の政治的策動をしようとしたことにより、追放となったとされる（笹目，1968，pp.14-15）。なお、1960年代大本教の平和運動路線を「左翼的」として厳しく批判し、総長出口栄二解任の要因をつくった人物でもあった（永岡，2021，pp.86-87）。

<sup>6</sup> 小田自身は、「昔、藤村操というのが華嚴の滝に飛び込んで死にましたが、その人の真似をしたわけじゃないが、それと同じように生きてる価値はない、世の中あくせく生きていることは意味はない、今生きているのは勇気がないからだと考えるに到って、遂に海へ死にに参りました。場所は犬吠岬なんですが」（小田，1967，p.29）と述べている。

<sup>7</sup> 同期（1917年入学か）には哲学者の三木清や谷川徹三らがいる。三木は小田について次のように書いている。「変り者といえば、私の高等学校の同級生で、遅れて京都に来た小田秀人などその随一で、大学時代には熱心に詩を作っていたけれども、しばらく会わないうちに心靈術に凝り、やがて大本教になったりしたが、なかなか秀才であった」（三木，1966，p.96）。

<sup>8</sup> 京都帝大の先輩にあたる、哲学者で評論家の土田杏村（1891-1934）によれば、小田は詩人として当時（1920年前後）京大では知られていたらしく、土田の友人で劇作家の高倉輝（1891-1986）が「大學にも非常によい作品を見せる詩人が一人ある。小田秀人といふのだ。京大から出る詩人として僕はもつとも多く信頼している」と紹介してきたという。そしてそれから10年ほど経った後、土田は実際に小田の訪問も受け、さらにその詩集『本能の聲』（ぐろりあそさえて、1928年）を読んで、「實に一篇の長編哲學詩」であり、「長い間の沈潜を静かに語る獨居の哲人だ」と評している（土田，1928）。以上から、小田は、大正生命主義的な時代精神の中で、自らの煩悶とともにある詩を書いた「哲学者」として高く評価されていたことが分かる。

<sup>9</sup> おそらく『本能の聲』を指している。その文章からは小田の煩悶青年としての姿を看取出来るが、本書について質問をしに来たのが大本教信者であり、小田は彼に連れられて大本教を訪ねたという（小田ほか，1978，p.59.）。

<sup>10</sup> 本名は「松森俊雄」であった（小田，1969a，p.37）。

<sup>11</sup> 菊花会には、大本教脱退後「心靈研究会」を主宰していた浅野和三郎・谷口雅春・岡田茂吉など大本教幹部でもあった人物から大きな影響を受け、後に「世界人類が平和でありますように」の標柱を創始したことで知られる五井昌久などが会員として参加していた（吉田，2015，p.95-96）。また同会で開催されていた「心靈実験会」には大本教の出口日出麿や、後述する紅卍字会の王天誠なども参加している（加藤編，1935，pp.47-56）。

<sup>12</sup> 小田によれば「書画壇」とは、普通の扶乩とは異なり、「乩筆（扶乩を行う際の筆一引用者）の先端に毛筆をつけ、唐紙を広げてその上に天啓の文字や画をかいて、特定の人に賜わること」である（小田，1968，p.35.）。

<sup>13</sup> 菊花会も含め「交霊会」と称する小田らの会合では、度々扶乩が行われている。なお、その記録を示した『心靈科学概要』には、扶乩が自動書記であることなどを説明したうえで、「満州に於ける張欣伯・張海鵬の政府首脳者は殆んど道院信奉者で、神意を体して王道政治に努められて居る」と述べられている（加藤編，1935，p.94）。ここから、小田らは扶乩（＝神意）を、現実と関わり、そして実際の満洲国「王道政治」の基礎となっているものと認識し、そこに大きな魅力を見出していたことがうかがわれる。

<sup>14</sup> 戦前期の 1936 年に日本国籍となり、戦後一度は中国籍に戻すが、1979 年に再び日本国籍としている。

<sup>15</sup> 呉清源は「大本教の天津支部の幹部から紹介状ももらってあった（呉，1997，p.71）」というが、日本に同行した兄の呉炎（景略）は彼に「なぜ大本教を訪ねるのか？大本教と紅卍字会の教義には同じところがあるから？それとも紅卍字会に大本教との連携を頼まれたのか？将来日本に紅卍字会を建立するためなのか？」と尋ねたが、口を利かなかったという（呉，1983，p.106，筆者訳）。

<sup>16</sup> 前掲註 2。

<sup>17</sup> 出席者は第一回については明確でない。

<sup>18</sup> 前掲註 2。

<sup>19</sup> Ref.B05015858600 (31)「世界紅卍字會日本總會設立ニ對スル文化事業部ノ方針」（1938 年 6 月 10 日）。

<sup>20</sup> Ref.B05015858600 (33)「世界紅卍字會ニ關スル件」（1938 年 6 月 9 日）。

<sup>21</sup> 前掲註 19。

<sup>22</sup> 前掲註 19。

<sup>23</sup> 当時、林出は満洲国宮内府「行走」を解任後、北京大使館に書記官として勤務しており、「表立った外交官活動ではなく、日本軍と中国人との間に入って裏面で宣撫活動を行う特殊な任務」に就いていた（佐々，2021，p.56）。したがって紅卍字会もその職務に関わるものであった。

<sup>24</sup> なお、この時点では、紅卍字会日本総会の資金について、日本における事務所費用は外務省、中国における「宣撫費」については陸軍省の負担としており、両省合同での事業を想定していた。

<sup>25</sup> Ref.B05015858600 (3)「世界紅卍字會ニ關スル第二回打合會ニ關スル件」（1938 年 6 月 24 日）。

<sup>26</sup> 前掲註 2。

<sup>27</sup> 前掲註 25。なお「東亞同胞協會」とは、大蔵によれば、下位春吉が「窮困の支那人救済の爲め、土木請負業者が北支に於る工事請負金の一分を醸金して、その実行に当る目的（内政史研究会・日本近代史料研究会編，1974，p.55）」で設立したという団体だが、詳細は不明である。

<sup>28</sup> Ref.B05015858600 (30)「世界紅卍字會日本後援會設立打合會ニ關スル件」（1938 年 7 月 9 日）。

<sup>29</sup> 前掲註 28。

<sup>30</sup> Ref.B05015858600 (4)「世界紅卍字會ニ關スル件」(1938年6月28日)。

<sup>31</sup> Ref.B05015858600 (6)「貴電合第一八六九號ニ關シ (世界紅卍字會ニ關スル件)」(1938年6月28日)。

<sup>32</sup> Ref.B05015858600 (7)「貴電合第一八六九號ニ關シ (世界紅卍字會ニ關スル件)」(1938年7月1日)。

<sup>33</sup> 他にも1938年7月から8月にかけて、済南、南京、青島、上海の各地から、宇垣外相の紅卍字会調査の指令を受けた報告書が上がってきている。そこではこの2点に加え、各地紅卍字会の慈善事業内容や信者数などの基本的データが報告されている。

<sup>34</sup> Ref.B05015858600 (34)「世界紅卍字會中華總會後援會ニ關スル件」(1938年7月25日)。

<sup>35</sup> 前掲註 32。

<sup>36</sup> なお趣意書については、当初後援会発起人に加わっていた「瑞霊会」会長の吉良宇治那里(と思われる人物)から、「當地道院紅卍字會ニ關係ヲ有スル」篁白陽(本名は若林不比等。別名には、篁不比等、黄理然など)に送られ、彼が林出より先に幹部に見せたところ、同じような反応があった(Ref.B05015858600 (24)「第一一六四號ノ一(至急)」(1938年8月8日))。

この篁は1896年に徳島に生まれ、上京して東京高等師範学校附属中学校卒業後、加工紙会社東光社を設立したがまもなく廃業し、明治大学へ進学して経済学を学んだ(東京高等師範学校附属中学校編, 1925, p.98, 統計資料協会編, 1934, p.361)。妹尾義郎ら日蓮主義者とともに大日本日蓮主義青年団設立に関わった信仰的青年であったが(大谷, 2019, p.329)、その活動から離れたのちは1921年に講談社に入社し『雄弁』記者を務めていた(講談社社史編纂委員会編, 1959, p.506, 統計資料協会編, 1934, p.361)。ある時「偶々皇太子殿下に供奉し山梨縣に赴きたる際、葡萄園を視察して以来農園經營に志し(統計資料協会編, 1934, p.361)」、菊花会の小田秀人とも関係があった霊媒師川上初枝なる人物と結婚して、1923年に満洲に渡り、「日高見農場」を經營しながら雑誌『農業の満洲』(1927～1943年に大連で出版)の編集人(1927年まで)や委員を務めていた(若林編, 1927, p.88など)。道院で修行ののち入信して紅卍字会満洲總會に入り、さらには北京總會にも関わって(沢崎, 1942, pp.140-141、には篁と思われる人物の描写がある)紅卍字会を日本の宣撫工作に利用しようとしていたとされる。後援会との関わりで言えば、篁は1938年に発起人から趣意書を受け取ったほか、帰国していた1941年11月11日には大阪神道各派青年会の主催で「世界紅卍字会の非常時活動」(於大阪市北区出雲大社教分院)について講演を行ったり(『中外日報』, 1941a)、また大阪に寄修所を設立しようしたりするなど(『中外日報』, 1941c)、積極的に後援会に関わっていた。篁は、紅卍字会における「日本人中最も有力な関係者」として紅卍字会中華總會副会長・紅卍字会満洲總會責任会長などの肩書を以って(『中外日報』, 1941a)、両国を股にかけた紅卍字会活動を行っていたとされるが、詳細は明らかでない。だが、後援会の満洲国・中国への活動を陰で支えていたのは間違いなく、その意味で後援会の重要な窓口ではあった。

<sup>37</sup> Ref.B05015858600 (25)「第一一六四號ノ二 (至急)」(1938年8月8日)。

<sup>38</sup> Ref.B05015858600 (47)「世界紅卍字會日本後援會ニ關スル件」(1938年8月24日)。

<sup>39</sup> Ref.B05015858600 (48)「世界紅卍字會日本後援會ニ關スル件」(1938年10月7日)。

<sup>40</sup> Ref.B05015858600 (52)「世界紅卍字會後援會補助金申請書」(1938年12月10日)。

<sup>41</sup> 前掲註 40。

<sup>42</sup> Ref.B05015858600 (49)「世界紅卍字會後援會ニ對シ助成金下附方ノ件」(1938年12月21日)。

<sup>43</sup> 後援会の会計をめぐる外務省の史料にそのことが現れている。1939年度における収支は、①収入 15,000 円（寄付金 7,000 円・会費 3,000 円・助成金 5,000 円）、②支出 15,000 円（事務所設定費 3,000 円、視察員・連絡員派遣費 2,000 円など）として、1939年7月29日に文化事業部に承認されたが、同部はこの収支計算書が確定されるまで、不明額が多いなど再三にわたり杜撰な会計を指摘しており、その「一事ヲ以テシテ既ニ其價値ナシ」とした（Ref.B05015858700 (17、26、29-30)「調査報告」(1939年7月2日)・「調査報告」(1939年7月29日)・「昭和十三年度事業概況報告書並ニ収支計算書」(1939年7月か)）。

<sup>44</sup> 前掲註 20。

<sup>45</sup> 最終的には、東京本部・北京事務所・南京事務所・張家口事務所を置いたが（日本文化中央連盟，1943，p.610）、東京本部以外の実態は不明であり、仮設した程度であったと思われる。

<sup>46</sup> Ref.B05015858600 (141)「世界紅卍字會後援會設立計畫書」(1938年12月10日)。

<sup>47</sup> なお、道院の宗旨が書かれた『修坐須知』には、「道院の道は乃ち無始無終無方無體の先天の大道にして、一教一宗が一部分に限るの比に非ざるなり」とあり、また『道慈問答』には、道院の「道」とは「天地人類萬有を生ずる所の先天の大道」であり、「道教は五教の一であり、大道の一端に過ぎないもの」とある（興亜宗教協会編，1941，p.53，p.56）。当然のことながら「惟神の大道」などは出てこない。したがって内田は、これら道院の公式教義を、(大本教の影響も受けながら)勝手に解釈し、執筆したと考えられる。

<sup>48</sup> Ref.B05015858600 (19)「世界紅卍字會後援會 昭和十三年度事業概況報告書」(1939年10月26日)。

<sup>49</sup> Ref.B05015858700 (31、76-77)「世界紅卍字會後援會昭和十三年度収支計算書説明」(1939年7月?)、「天津水災救済資金募集趣意書」(1939年10月)。

<sup>50</sup> JACAR Ref.A15060026500(1-4)「大日本興亜同盟」(1942年8月17日)、「大政翼賛会その他翼賛政治団体役

員名簿」(国立公文書館)。

<sup>51</sup> 建物は昭和神聖会時代の写真を見る限りビルではなく一軒家のようにあるが、当時の地図を確認すると敷地は広大で、その中にいくつか建物があった可能性がある(大本70年史編纂会編, 1967, p.173、内山模型製図社編, 1932, 第9図)。

<sup>52</sup> 1943年12月に発行された『日本文化団体年鑑』(新井恒易編, 1943)には、たしかに後援会の名があるが、そこには1941年までの事業沿革・計画しか記載されていない。これと『中外日報』の報道を掛け合わせて考えると、やはり後援会の名による実質的活動は1942年を以って終了し、翌1943年からは璽宇となったと考えてよいだろう。なお、余談になるが、戦後においては後援会の大島・小田・呉、さらには林出賢次郎らが中心となって紅卍字会の再興を目指し、のちに日本紅卍字会を設立した(現存する)。同会には旧後援会メンバーのほか、笹川良一なども関わっており、種々の政治・社会活動を行った。こういった戦前・戦中の後援会・璽宇から、戦後の日本紅卍字会設立への経緯やその思想的背景も今後明らかにする必要がある。

## 付記

本論文は、「宗教と社会」学会第30回学術大会における個人発表「宗教の「現地化」と戦争—第二次大本事件後における道院・世界紅卍字会の「日本化」—」に大幅な加筆・変更を加えたものである。

## 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP22J12284 (「20世紀東アジアにおける宗教交流と思想連鎖—道院世界紅卍字会と大本教の連合運動—」)の助成を受けたものである。

なお、本論文執筆に係る史料収集の一部は、「オタどん」氏のブログサイト「神保町系オタオタ日記」(<https://jyunku.hatenablog.com/>)における、「紅卍字会」関係の記事を参考にした。また大本教団関係史料の収集にあたっては、大本教学研鑽所資料室の方々大変お世話になった。ここに記して感謝申し上げる。

## 参考文献一覧

日本語(五十音順)

新井恒易編(1943)『日本文化団体年鑑：昭和18年版』財団法人日本文化中央連盟

伊藤隆・佐々木隆・季武嘉也・照沼康孝編(1983)『近代日本史料選書1-4 真崎甚三郎日記 昭和14年～昭和15年12月』山川出版社  
宇垣一成談(1938)「十一、北支の問題」『對支文化工作に關する論調(調査資料第14輯)』衆議院調査部、pp.214-220.

内田良平(1931)『滿蒙の獨立と世界紅卍字會の活動』先進社

内山模型製図社編(1932)『東京市四谷区地籍図』内山模型図社

大島(嶋)豊(1939)「蒙古事情」仏教聯合会編『新東亞の建設と佛教』仏教聯合会、pp.165-179.

—(1941)「序」善隣協會・善隣高等商業学校共編『世界の動向と東亞問題』生活社、pp.1-4.

- 大谷栄一 (2019) 『日蓮主義とはなんだったのか』 講談社
- 「大本時報」(1935) 『真如の光』 157号、天聲社
- 大本70年史編纂会編 (1964) 『大本70年史』 上巻、宗教法人大本
- (1967) 『大本70年史』 下巻、宗教法人大本
- 大本70年史編さん会事務局編 (1962) 『大本70年史資料(記録10) 大正10年～昭和10年 分科会における第一次原稿討議の記録(抄3)』 大本70年史編さん会
- 小田秀人 (1938) 「信用できぬ支那社會に信用出来る唯一の團體—治維會員の半以上占めて活躍 彼らと心から提携せよ」 『中外日報』 10月13日
- (1939a) 『長期建設と世界紅卍字會の活動』 世界紅卍字會後援會
- (1939b) 「世界紅卍字會の信仰及事業」 『新東亜の建設と仏教』 仏教連合會
- (1940) 「紅卍字會とは何か—張氏ら同會有力者を迎へて」 『読売新聞』 6月30日
- (1942) 「世界紅卍字會存在の意義」 『興亜』 大日本興亜同盟、pp.98-107.
- (1967) 「心霊回顧談(一)」 『心霊研究』 242号、日本心霊科学研究会、pp.28-32.
- (1968) 「心霊研究こぼれ話」 『心霊研究』 255号、日本心霊科学協会、pp.35-36.
- (1969a) 「物理現象霊媒亀井三郎氏の想い出(一)」 『心霊研究』 264号、日本心霊科学協会、pp.36-40.
- (1969b) 「人間の歯車を神の電動機に繋ぐ虹の大ベルト—真理実践の道」 『心霊研究』 267号、日本心霊科学協会、pp.34-37.
- (1970) 「心霊随想 心霊現象の実在性(1)」 『心霊研究』 280号、日本心霊科学協会、pp.40-42.
- 小田秀人・津田江山・後藤以紀・大西弘泰・塩谷勉 (1978) 「心霊研究の回顧と展望(座談会)」 『心霊研究』 380号、日本心霊科学協会、pp.57-75.
- 加藤吉人編 (1935) 『心霊科学概要』 加藤吉人、1935年、pp.47-56.
- 興亜宗教協會編 (1941) 『世界紅卍字會道院の実態(興亜宗教叢書第6輯)』 興亜宗教協會
- 講談社社史編纂委員會編 (1959) 『講談社の歩んだ五十年 明治・大正編』 講談社
- 皇道大本本部 (1931) 「牛込支部名簿」 皇道大本牛込支部
- 皇道大本本部編 (1933) 『皇道大本事務便覧(分所支部備付)』 天聲社
- 皇道大本地方宣傳課編 (1935) 『信者宣傳使名簿(昭和十年七月一日現在)』 天聲社
- 国策研究会編 (1939) 『昭和十三年度事業及會計報告』 国策研究会
- 吳清源 (1942) 『隨筆』 砂子屋書房
- (1960) 「道院と世界紅卍字會」 『人物往来歴史読本』 5巻7号、人物往来社、pp.128-129.
- (1984 / 1997) 『吳清源回想録—以文会友』 白水社
- 佐々充昭 (2021) 「林出賢次郎の生涯—大本教と道院・紅卍字會との提携を仲介した外交官」 『立命館文学』 676号、立命館大学人文学会、pp.45-61.
- 笹目秀和 (1968) 「六周年記念日を迎えて = 回顧十五年の概観 =」 『日本卍字月刊』 12巻11号、世界紅卍字會日本總會、pp.11-15.
- 沢崎堅造 (1942) 『東亞政策と支那宗教問題』 長崎書店
- 清水勇 (2007) 『ある日の五井先生』 オンブック
- 昭和青年會本部編 (1934) 『昭和青年會昭和坤生會一覽』 昭和青年會本部
- 世界紅卍字會後援會編 (1939) 『世界紅卍字會後援會趣意書(附規約)』 世界紅卍字會後援會
- 芹沢光治郎 (2015) 『芹沢光治良戦中戦後日記』 勉誠出版
- 善隣協會編 (1942) 「協會彙報」 『蒙古』 通巻118号、善隣協會、p.134.
- 玉置文弥 (2021a) 「道院・世界紅卍字會と大本教—提携初期における協力の実態と『滿蒙』」 『現代中国研究』 46号、中国現代史研究会、pp.66-99.
- (2021b) 「『神戸道院』・『万国信教愛善會』の活動と大本教」 『文研会紀要』 32号、愛知学院大学大学院文学研究科文研会、pp.55-72.
- (2022a) 「大本教人類愛善會・道院世界紅卍字會の“融合”と“滿洲”—「東瀛佈道団」訪日と出口王仁三郎の「滿鮮巡教」を中心に」 小林隆夫・松下憲一・服部隆行編 『菊池—隆教授退職記念論集 東アジア近現代世界の諸相』 集広舎、pp.65-87.
- (2022b) 「『宗教統一』とアジア主義—大本教と道院・世界紅卍字會の連合運動『世界宗教連合會』の活動実態から—」 『宗教と社会』 28号、「宗教と社会」学会、pp.1-15.
- (2022c) 「時代精神と宗教—超国家主義としての大本教」 『橋川文三—社会の矛盾を撃つ思想—いま日本を考える』 河出書房新社、pp.126-147.
- 對馬路入 (1991) 「敗戦と世直し—璽宇の千年王国思想と運動—(1)」 『関西学院大学社会学部紀要』 63号、関西学院大学社会学部研究会、pp.337-371.
- 土田杏村 (1928) 「秀人氏の『本能の聲』」 『朝日新聞』 11月30日
- 東京高等師範学校附属中学校編 (1925) 『東京高等師範学校附属中学校一覽 自大正9年4月至大正10年3月』 東京高等師範学校附属中学校
- 統計資料協會編 (1934) 『文化事績録』 B巻、統計資料協會
- 内政史研究会・日本近代史料研究会編 (1973) 『大蔵公望日記』 1巻(昭和7-9年)、内政史研究会・日本近代史料研究会
- (1974) 『大蔵公望日記』 3巻(昭和13-16年)、内政史研究会・日本近代史料研究会
- (1975) 『大蔵公望日記』 4巻(昭和17-20年)、内政史研究会・日本近代史料研究会
- 永岡崇 (2021) 『宗教文化は誰のものか—大本弾圧事件と戦後日本』 名古屋大学出版会
- 松本健一 (2012) 『増補 出口王仁三郎—屹立する最後の革命的カリスマ』 書籍工房早山
- 三木清 (1942 / 1966) 「わが青春」 久野収編 『現代日本思想大系』 33巻、筑摩書房、pp.95-98.
- 宮田義矢 (2015) 『教義の中の近代—道院・世界紅卍字會の教義形成研究—』 東京大学大学院人文社会学系研究科博士論文

吉田尚文 (2015) 「五井昌久の思想形成にみられる他教団からの「影響」」『国学院大学大学院紀要』47号、國學院大學大学院文学研究科、pp.87-107.  
 労働経済調査所編 (1935) 『愛國運動現勢』第1輯、労働経済調査所  
 若林不比等編 (1927) 『農業の満洲』創刊号、農業の満洲社

#### 中国語 (拼音順)

杜博思 Thomas David Dubois (2012) 「政治与慈善：20世紀二三十年代的道院暨世界紅卍字會」社会问题研究丛书编辑委员会编『会党、  
 教派与民间信仰：第二届中国秘密社会史国际学术研讨会论文集』知识产权出版、pp.233-254.  
 高鵬程 (2011) 『紅卍字會及其社会救助事業研究 (一九二二—一九四九)』合肥工業大学出版社  
 孫江 (2016) 「救贖宗教的困境—「滿洲國」統治下的紅卍字會」『作為他者的宗教—近代中國的政治與宗教—孫江自選集』博揚文化、pp.148-167.  
 王睿 (2010) 「白玉縁何有瑕—再論中日民族冲突中的吳清源」『福建师范大学学报 (哲学社会科学版)』2010年第3期、福建师范大学、pp.122-128.  
 吳景略 (1983) 「吳清源的圍棋生涯」中国人民政治协商会议天津市委员会文史资料研究委员会編『天津文史資料選輯』第25輯、天津人民出版社、  
 pp.91-117.

#### JACAR (アジア歴史資料センター)

Ref.A15060026500 「大政翼賛會その他翼賛政治団体役員名簿」(国)  
 Ref.B05015858600 助成関係雑件第5巻「紅卍字會助成 自昭和十三年六月分割1」(外)  
 Ref.B05015858700 助成関係雑件第5巻「2、紅卍字會助成 自昭和十三年六月分割2」(外)

#### 新聞

『朝日新聞』(1941)「興亞同盟に二團體加入」9月3日  
 『北國夕刊新聞』(1931)「全支親日の爲紅卍字を援護せよ—内田良平氏、政府に建白」10月26日  
 『中外日報』  
 — (1938a) 「日滿支親善と世界平和の促進圖る—我國民間有識者により世界紅卍字會後援」10月15日  
 — (1938b) 「新東亞創建に参劃—紅卍字會後援會成る—明春早々總會開く」12月15日  
 — (1938c) 「具體的實動議す—世界紅卍字會後援—けふ、初の理事會」12月25日  
 — (1939a) 「全東亞の首都東京に愈よ『道院』開設—世界紅卍字會に對する吾が國朝野の認識を濃化」4月7日  
 — (1939b) 「世界紅卍字會後援會九月末發會式舉ぐ—教義を正しく理解して彼我の親善に資す」8月22日  
 — (1940a) 「道院の信仰で日滿親善—張海鵬侍從武官長迎へ我國關係者が懇談遂ぐ」7月2日  
 — (1940b) 「教界の名士集ひ紅卍字會を聴く—きのふ、新島會館の盛況」7月5日  
 — (1940c) 「善隣協會大島氏談—教團を相手とせず紅卍字會に期待—大陸教化問題」7月6日  
 — (1940d) 「華僑關係者に呼びかけ—紅卍字會後援會の擴大—先づ神戸、大阪で懇談會」7月9日  
 — (1940e) 「滿洲支那に跨がる新興宗教—世界紅卍字運動と其信仰」7月14日  
 — (1940f) 「紅卍字會後援會大阪懇談會」7月19日  
 — (1940g) 「大陸の文化工作と皇道—高島大佐や大久保中佐中心に紅卍字會後援會の懇談會」7月24日  
 — (1940h) 「紅卍字會の國內體制確立—大阪に關西據点獲得—松井中將來月三日西下」7月24日  
 — (1940i) 「紅卍字會後援會大阪で懇談會」8月4日  
 — (1940j) 「世界紅卍字會大阪後援會事務所開設」9月26日  
 — (1940k) 「日華提携の精神的根本格的に發足—世界紅卍字會後援會」11月15日  
 — (1941a) 「世界紅卍字會の非常時活動聴く—けふ、大阪神道各派青年會」11月11日  
 — (1941b) 「世界紅卍字會の事務所移轉」11月18日  
 — (1941c) 「在阪華僑の精神的支柱に—紅卍字會道院寄修所設く」12月11日